

ISSN 0385-028

沖縄県立博物館紀要

第 14 号

1988

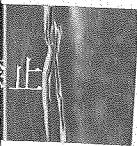
BULLETIN OF
THE OKINAWA PREFECTURAL
MUSEUM

No.14

1988

沖縄県立博物館

OKINAWA PREFECTURAL MUSEUM



沖縄県立博物館紀要

第 14 号

1988

沖縄県立博物館

目 次

| | | |
|-------------------------------------|---|----|
| 知念 勇・池田栄史・江藤和幸： | 灰釉碗からみた近世沖縄古窯の編年 | 1 |
| CHINEN, I., Y. IKEDA, and K. ETOH : | Tentative Chronology of Okinawan Kiln (Wakuta, Tuboya, and Kogachi) According to Style of Ash Glaze Bowl | |
| 高良 倉吉： | 首里城正殿に関する建築史年譜 | 23 |
| TAKARA, K. : | A Chronological Table on the Reconstructions of the Main Hall in Shuri Castle | |
| 新城和治・日越国昭： | 那覇市小禄金城公園（予定地）の植物 | 31 |
| SHINJO, K. and K. HIGOSHI : | Vegetation of Kinjoh Park (Planned Area) at Oro- ku, Naha City, Okinawa Island | |
| 千木良 芳範： | 多良間島の両生爬虫類について —— サキシママダラの採集例とヌマガエルの移入 | 51 |
| CHIGIRA, Y. : | On the Herpetological Fauna of the Tarama Island, the Miyako Islands —— Additional Records of the Snake <i>Dinodon rufozonatus walli</i> | |
| <資料紹介> | | |
| 上江洲 均： | 喜如嘉の土地売却証文類 | 57 |
| <Short Note> | | |
| UEZU, H. : | Land Sale Contracts of Kijoka Village, Okinawa Island | |

灰釉碗からみた近世沖縄古窯の編年

知念 勇⁽¹⁾・池田栄史⁽²⁾・江藤和幸⁽³⁾

(⁽¹⁾沖縄県立博物館、⁽²⁾沖縄大学非常勤講師、⁽³⁾琉球大学史学科)

Tentative Chronology of Okinawan Kiln (Wakuta, Tuboya, and Kogachi)
According to Style of Ash Glaze Bowl

Isamu CHINEN⁽¹⁾, Yoshifumi IKEDA⁽²⁾, and Kazuyuki ETOH⁽³⁾

(1) Okinawa Prefectural Museum (2) Division of General Education of Okinawa University (3) Historical Division of the College of Law and Letters University of the Ryukyus

一、はじめに

近年、沖縄における近世の古窯とその製品に関しては、考古学の分野からも強い関心がもたれるようになってきた。その原因のひとつに、最近までほとんど手のつけられなかつた近世の集落跡やそれに伴う墓地などが、埋蔵文化財の対象とされ活発に発掘調査が行われていることが上げられる⁽¹⁾。

これら近世の遺跡からは、九州や中国産の陶磁器と沖縄産の陶器などが多数出土する。グスクなどから出土する陶磁器の、80~90%が中国産の輸入陶磁器で占められる⁽²⁾のに対し、近世の遺跡から出土する陶磁器は中国の輸入陶磁器にとってかわって、沖縄産の陶器で占められるようになる。

しかしながら、このように大量に出土する沖縄産の陶器に関しては、編年的位置づけが明確ではないために、概括的な報告にとどまっているのが現状である。窯の創設などに関する資料に乏しく曖昧な点が多い。

しかしながら最近、先述したように考古学の分野から沖縄の近世陶磁の偏年に關心が集まり編年についてもとりくまれつつある⁽³⁾。本稿では湧田窯跡・古我知窯跡・壺屋窯跡などから採集された当館所蔵の灰釉碗などを中心にして、窯詰技法や器型変化などの特徴により、これらの窯の成立年代などについて考えてみたい。なお今回紹介する資料はすべて

窯跡周辺からの表面採集資料であり、発掘調査によって得られた資料ではないことをあらかじめことわっておきたい。

二、 窯跡の概要とその採集資料

1) 古我知窯の概要

本窯は名護市古我知奥又原山中の中腹にある。昭和16年頃山里永吉氏によってはじめて調査された⁽⁴⁾。この地域は現在砂糖きびとパイン畑となっており、多数の陶器片と窯道具などの破片が採集されている。しかしながらこの窯に関する文献等の史料は皆無であるため、創設については不明である。

古我知窯跡が確認され窯跡から多数の製品が採集されたことによって、各地の古墓からこの窯の製品とみられる厨子甕などが発見され資料が増加した。

古我知窯跡や古墓から採集された製品には、水甕類、壺類、厨子甕、香炉、花生、徳利、摺鉢、皿、灰釉碗、鉢、獅子置物、火取り、急須、アンビン、火鉢、網のおもり、桶、茶碗、瓶子、サークーなどのあることが確認されており、壺屋などとほとんど変わらないほど多種のものが焼かれていたことがわかる⁽⁵⁾。

2) 古我知窯跡の採集遺物

当館には昭和51年から同56年の間に採集された約5百点余の古我知窯製品の破片がある。それらの中から、今回は特に灰釉の碗を中心に紹介し検討することにした。

第Ⅰ図は古我知窯跡からの採集資料である。同図1から6までが碗である。2の黒釉を除くとすべて灰釉の碗である。同図1は胴部がわずかに膨らみをもち、胴部の下部から底部にかけてはヘラ削りで、その上部から口縁部は水引成形である。この点は1から6までのすべてに共通である。外底部の中央部がへそ状に取り残され、もりあがった状態で残されている。高台の畳付の幅は3~5耗ほどで、多少外側へ開きぎみに削られている。同図3だけが高台畠付の部分が尖っている。

施釉はフィガーキイとよばれる方法によりなされているため、胴部下部から下は露胎となる。口径に対する底部と器高の比率は、前者が0.48で後者が0.45である。後述の湧田窯に比べて腰が低い。

同図6の内底には、重ね焼き時の高台部分の付つきが見られる。これらの碗には砂目積めの痕跡も認められるが、後述する湧田焼き程顕著ではない。

同図7と8は無釉のフタである。上のつまみや全体の形状は須恵器を思わせるものがあ

る。同図10～13は香炉器形のもので、褐釉または黒釉がほどこされている。13は三足の鍋形をしているが、口縁部が鰐縁状に外反している。そのため蓋付きの小型鍋とみられるサーク（薬を煎じる鍋）ではないかと考える。これの内面には灰釉が施されている。

同図16は盤状のもので、14・15・17は皿である。同図19と20は擂鉢で、20は高台を有する。21と23は香炉状のもので22は黒釉の急須である。

古我知焼の上釉には、黒褐色を基調としたものが多いたい。とくに甕・壺・鉢・高炉・厨子甕は黒釉であるが碗は大半が灰釉である。この他クワデーサ色と称する黄緑色の甕や白釉もごく一部ではあるがみられる。しかしながら、湧田窯や窯屋などで見られる染め付けは未発見である。

古我知の灰釉碗の胎土は精製された白土が使用されている。そのため、焼成温度が高く、磁器質に近い焼きとなっている。

3) 湧田窯（壺川窯）の概要

那覇市泉崎の県庁所在地を中心に、壺川を含めたかなり広い地域にまたがって分布している。県庁所在地を中心に瓦窯があり、その東南側と壺川付近を中心に上焼窯が在ったと考えられる。

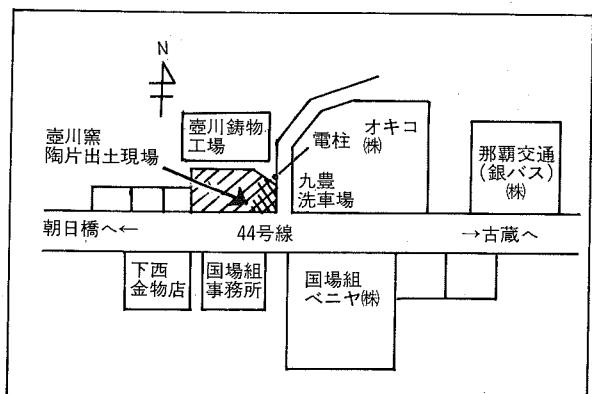
『球陽』附巻には元和3年(1617)「尚豊王は王命により薩摩から朝鮮(高麗)人陶工である、一六(張獻功)・一官・三官を連れて帰り、湧田村で陶法を教えさせた。」と記されている。家譜によると⁶、

三人の朝鮮陶工たちは王府からそれぞれ住宅があてがわれ、陶業の指導をした。一六は帰化して仲地麗伸と名乗り沖縄の女性と結婚し、子孫代々陶業を受け継いだ。

その後、平田典通や仲村渠致元らの名陶工もここで作陶しており活躍した場である。湧田窯は壺屋に統合されるまでは沖縄における最大の窯場であった。

昭和61年から、沖縄県の新庁舎建設に伴って瓦窯の中心地と見られる地域の発掘調査が行われた。その結果、数基の半地下式の平窯(瓦窯)が発見され注目された。これらは南中国辺りに起源を持つとみられる。

本稿で紹介する湧田窯の資料は、やちむん会々員であった平良専明氏によって、昭和45年6月に発見された。この場所は那覇市壺川240番地の上原信一氏の所有地で、アパート建設中の工事現場から発見されたものである。これらの採集遺物については、宮城篤正氏



第1図 壺川窯附近見取図(発見当時)

によってその概略が報告されている⁽⁷⁾。

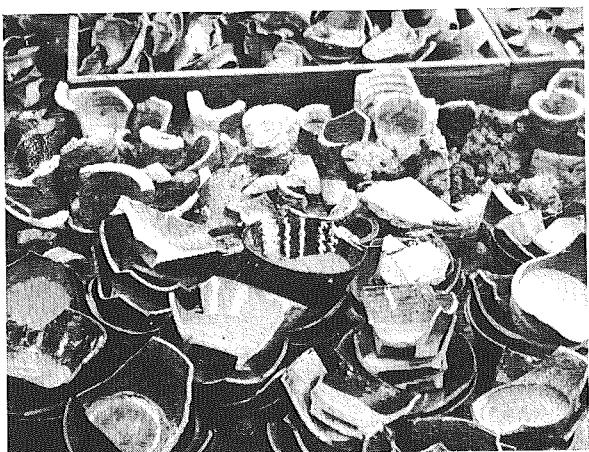
これらの遺物は、建設中のアパートのコンクリート柱穴を掘る作業現場で発見された。工事との関係で発掘調査は不可能だったので、表面採集にとどまった。

この窯について宮城氏は、「壺川窯としてとらえ、壺川窯は1743年用啓基仲村渠致元によって築かれた窯であり、それがおよそ明治の中頃まで焼かれていたといわれる。発見された壺川窯が致元の開窯になるかどうか、或いはその他の窯であるかも知ないので、その点確かなことは言えない。いずれにしても壺川窯の流れを汲む窯であることは間違いないからう。」としている。

仲村渠致元は、唐名を用啓基といい那覇市泉崎に生まれた。1743年王命によって八重山に渡り陶法を伝え、1730年には陶技研修のため薩摩へ派遣された。

鎌倉芳太郎氏は、致元と薩摩との関係について次のように述べている⁽⁸⁾。「致元の遺作に、白磁釉、青磁釉、瑠璃釉のものがあるが、これ等は金和の肥前伝の再来のように思われる」。また仲村渠家の家譜によると、「雍正九年（1731年）、陶業を薩州の法によって築き立てた。これは、従来の窯では焼きあがって窯出しどする時に陶器がよく破損する。そこで窯の中に階段を設け、試陶の結果破損がないので、諸窯もこれに学ぶようになった。」「乾隆八年、真和志間切古波蔵村百姓地山野の内あて川原（千七十八坪四分八厘）に新窯を築き、従来の壺屋の窯（嘉数築登之親雲上共有）より引越す。同十年、座敷叙せらる。同十六年、尚穆王践祚に当り、賀儀の事のために、憲令を奉じて御土器を焼きだし献納する。」とある。このようなことにより、仲村渠致元によって、乾隆八年那覇市古波蔵の山野の内川原に新窯を築いたことが知られる。これが壺川窯ではないかと考えられる。

4) 湧田窯跡（壺川窯）の採集遺物



第2図 湧田窯（壺川）採集遺物

この窯からの採集品には、碗、皿、茶碗、カラカラ、花活、火取、ワンブー、急須、対瓶、などの製品と、トチ、カラマー、サヤなどの窯道具がある⁽⁹⁾。

第II図の24から44までは、湧田窯跡採集の灰釉碗である。器型の上から大きく2タイプに分けることができる。そのひとつであるタイプAは、28に代表されるもので高台部から口縁部にかけて直線状に立ち上がる碗である。同

図24から34・36・43がこのタイプに属する。もうひとつのタイプBは、第Ⅱ図35・38・42・44にみられるもので胴部の下半部がわずかに膨らみをもち、口縁部がわずかではあるが外反するタイプである。

これらのA・Bタイプとともに、胴部の下半部から高台にかけてはヘラ削りであるのに対し、その上から口縁部にかけては水引成形となっている。

上釉はすべてフィガーキイによって施された灰釉で、ダークグリーンを呈していて不透明である。高台置付けの幅は4～5ミリと古我知に比較して多少幅がある。同図44は、あまい焼きのもので、焼成温度が低く胎土が白いために上釉の灰釉が白釉のように白くなっている。

これらの灰釉碗の口径に対する高さと底部の比率の平均値は、タイプAが0.54でタイプBが0.50となっており、古我知窯や窯屋窯のものに比べると大きい。つまり、底部から口縁部への立ち上がりが急なものである。43は古我知のものに近く、44は窯屋へつながると思われる。

第Ⅲ図は白釉、黒釉、染付（清釉）などのもので、45～47は内湾形の小型碗である内外面ともに白釉が施され、45と47は口紅状に口唇部に褐釉が施されている。内底面は、すべて蛇の目釉かきとりとなっている。48～52は胴部が張る外反タイプの碗で、48と50が白釉の他はすべて黒釉である。64は胴部に灰釉碗が付着した黒釉の急須である。62、63、65は外面は黒釉で内面は灰釉が施され、コバルト釉の丸玉文を円形に配した花文が見られる。66は内外ともに白釉が施されその上に花文の染め付けがなされる大振りの碗である。

以上の採集遺物からみると、この壺川から採集された資料のうち、第Ⅱ図の灰釉碗と第Ⅲ図の白釉及び黒釉や染め付けなどの製品の間には時間差のあることが考えられる。その理由のひとつは、窯詰めの技法が灰釉碗では砂目詰めであるのに対し45以後は蛇の目釉剥ぎになっている。ふたつめは、碗の器型が底部から口部へ直線的に立ち上がるものから、第Ⅱ図44のような外反タイプ、49や52のように胴部が張り外反するタイプへと変化していく、器型の変化を捕らえることができる。

湧田窯（壺川）から採集された遺物は、その出土状況が明確ではない。しかし前述したように、採集遺物からみると時期差が認められる。そのためこの地は灰原などの窯跡ではなく、他の場所から持ってきて捨てた場所である可能性もある。

5) 壺屋窯の概要

那覇市牧志の南一帯を壺屋と称している。この地に窯屋窯が開窯されたことについては、『球陽』（卷之七）に次のように記録されている。尚貞王14年、康熙21年（1682）「移三設陶業二干牧志邑地」の状に、昔有二窯屋一、在二美里群知花邑、首里宝口、那覇湧田等地、

共計三箇所一、至二千是年一、其三地陶窯移二在牧志邑南一、以為二一所一也（昔窯屋は美里の知花と首里の宝口、那覇の湧田の三か所にあり、その陶窯を牧志村の南に移して合併させた）。

窯屋の統合は、『平等所裁判記録』のなかの「花城親雲上御褒美願い」の記録によると、『球陽』の記録より1年おくれてあったことが知られている¹⁰。以来、窯屋は琉球陶器的一大生産地となり、あらゆる種類の陶器が生産されるようになった。

戦後もいち早く窯屋は復興し、活発に陶器の生産がなされた。1960年代からは急激にこの地域の市街化が進み、上り窯の煙による公害問題が持ち上がってくる。1970年代になると公害問題で、上り窯が使えなくなり、窯屋ではガス窯に変わって行く。そして1972年には、窯屋を代表する陶工金城次郎氏が読谷村座喜味へ窯を移し、窯屋の新しい時代が開始される。

6) 窯屋窯跡の採集遺物

第V図が壺屋窯跡から採集された遺物である。同図77・78・79は湧田窯の系統を引く灰釉の碗である。いずれも砂目積めの跡がみられるが湧田窯のものほど明瞭ではない。77、78は底部から口縁部にかけて直線的に延び、胴部から口縁部は水引で、底部はヘラ削り成形である。このような成形や胎土などは、湧田窯にも共通する特徴である。しかし口径に対する器高と口径に対する底径の比率がいずれも0.48である。これに対し、湧田窯は0.50（底）と0.54（高）であるので、湧田窯の方が腰高である。77と78の灰釉碗は、腰が低い点などは古我知窯のものに近い。

最近聞き取り調査した結果によると、窯屋から湧田窯系の灰釉碗が採集される範囲は、県指定の荒焼き窯（南の窯）（フェーヌカマ）の付近と、その北側のあるカマヌニーガマと称するところである。陶業組合の小橋川秀義氏やシーサー（獅子）作りの陶工石川喜進氏からの聞き取りでも、この一帯が窯屋に統合された直後の窯場であったと言われ、当時は多くの陶工たちが湧田に居住していて、窯屋まで通って仕事をしていたといわれる。

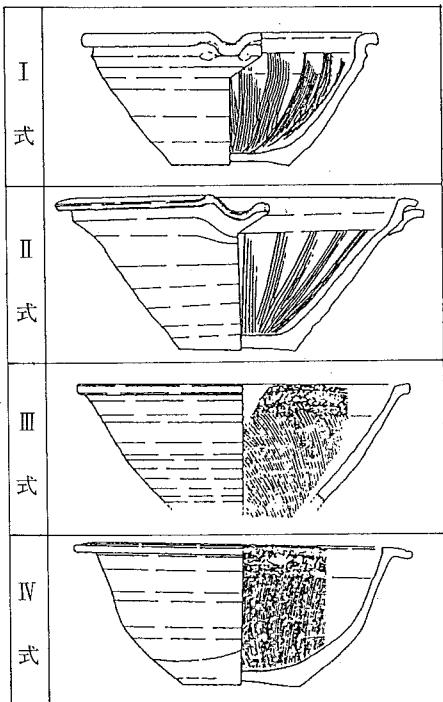
第V図79の灰釉碗は口縁部が欠失している。底部から胴部へ移行する部分が多少円くなっている。これも古我知の第I図6と類似する点である。第V図81、82は胴部が円くなり、口縁部が外反するタイプの染め付けの碗である。高台が高く、内底部には蛇の目釉剥ぎがみられる。85の黒釉の碗は口縁部が直交であるが高台が高くなっている。83は内湾する小型の碗で、内面が灰釉で外側は黒釉である。同図87と90も同様の施釉方法をとっている。92はランプであるが、上部の方が焼くときに歪曲している。

文献よりみた沖縄における窯業の開始は、1713年に編集された『琉球国由来記』にみることができる。これによると、唐人渡嘉敷三良（？～1604年）が始めたと言われる真玉橋

の瓦窯がそうである。

第V図86～89は白土が使用された上質の杯である。86は鉄釉の上に上掛けが行われている。87と89では面取りがほどこされている。91は鉢形をした擂鉢で安里氏等による⁽¹⁵⁾擂鉢の編年では第IV期になる。

第V図93、94、95はトチンまたはトチである。陶器の胎土と同じ土を使つたいわゆる同ドチである。81から95までは最近まで造られて使われたとみられる製品である。77～79までの製品と81以降の製品には、時間差を感じられるので、その間を埋める作業が今後必要である。



第3図 擂鉢の編年（安里他原図）

三、考 察

以上、各古窯からの採集遺物について述べてきたが、これらの採集遺物の特徴を整理することにしたい。

まず古我知窯についてまとめてみると、以下のようになる。

①第I図1～6の灰釉碗は、底部から口縁部への立ち上がりが直線的ではない。口縁径に対して器高が低い、つまり湧田窯のものに比べると外傾するなどの特徴から、湧田窯の灰釉碗Bタイプに属する。②重ね焼きのときの砂目積め跡がみられるが、湧田窯ほど明確ではない。③古我知窯には、蛇の目釉剥ぎもある。④胎土は白色土が使われており、灰白色になる。上釉は湧田窯が不透明であるのに対して古我知窯は光沢があり、透明である。⑤前述したように多くの器種がある。⑥上釉は黒褐色釉を主とするが灰釉もあり、わずかではあるが白釉がある。染め付けの製品は未発見である。

湧田窯の特徴は、①灰釉碗のタイプAは底部から胴部への立ち上がりが急である。②灰釉碗は重ね焼きの時の砂目積めの跡が明瞭に残っている。③第II図と第III図では時期差があると考えられる。④第III図は、黒釉、コバルト釉または染め付け、白釉などが見られる。同図45、47は白釉の小碗の口唇部に黒釉が施され、いわゆる口紅状の釉がけがなされている。⑤第III図の碗は蛇の目釉剥ぎである。⑥第III図53と66は染め付けである。

壺屋窯については、①第V図77、78の湧田窯から引き継がれた灰釉碗とみられるものである。砂目積めが認められるが湧田窯ほど明瞭ではない。②口径に対する器高が低く器形上は古我知窯の碗にものに近い。これらの碗は成形や上釉などは、湧田窯の製品に酷似する。③同図77、78と81～85までの碗では器型に大幅な変化がみられることから、両者にはかなりの時間差が認められる。④同図82、85、91は高台が高いわゆる広東碗に近い。⑤同図の82～87までは、最近那霸市の教育委員会から依頼されて調査した。壺屋の南（フェー）の窯（上焼き窯）から採集した遺物と同一のものである。これらの物は本土復帰直前まで焼かれていたといわれる、などの特徴がある。

これらの遺物からみた特徴に加えて特に沖縄の古窯の編年となりたちを考えるために、最近発掘調査が活発になってきた九州の古窯とその成果がきわめて重要であると考える。なかでも多くの成果を上げている佐賀県（有田・伊万里）における調査をもとにまとめられた、大橋康次氏のいくつかの論文がある⁽¹¹⁾⁽¹²⁾⁽¹³⁾。それらの中から、沖縄の古窯ともかかわるとみられる、窯の形態や窯詰方法などの事項をいくつか年代順に拾い出してみると以下のとおりである。

①、唐津焼が慶長4年（1604）銘の木簡と共に伴した。（平安京）

②、唐津焼が天正13年（1585）銘の木簡と共に伴した。（堺環濠都市遺跡）

③、砂目積は、慶長3年（1598）の秀吉が朝鮮出兵の時に連れ帰った陶工によってこの窯積技法が九州へ伝わったと考える。

④、胎土目積から砂目積に変わるのは、1598年頃とみられる。この頃から磁器が焼かれるようになった。（原明窯ではこの頃白磁碗が焼かれた）

⑤、17世紀の初期には、皿の見込みに円凹の削り込みを施した磁器がみられる。これは李朝磁器にみられる特徴であるので、朝鮮人陶工たちによって作られたと考えられる。

⑥、寛永14年（1637）、鍋島藩は有田・伊万里地方の窯場の整理統合をなし、日本人陶工を追放し13の窯場に統合した。これ以後、有田周辺で砂目積の灰釉陶器の皿は焼成されていない。

⑦、15、16世紀に多く輸入された、中国・明時代の青磁や白磁・青花は目積方手法をとっていない。ところが李朝陶磁の窯詰技法には目積がある。胎土目積は14世紀の高麗後期からみられる。中国広州周辺の窯では、15～16世紀の皿類は胎土目と細かい砂積によるが、16世紀の亭支里窯や16世紀後半から17世紀前葉の炭窯里窯、詳林里窯などにおいて砂目があり、その後は砂目積となる。砂目積めのものとしては、1609年銘の白磁舍合子が出土している。このように16世紀から17世紀頃にこの砂目技法が盛行した。

⑧、砂目積の溝縁皿の下限年代を消費地の資料でみると、1618年新潟県長岡城蔵王堂城跡の資料からの壕あとから出土する。

⑨、1630年代までは皿の口径に対する底径の割合が2,7分の1程度と小さいが1640～50年代には2分の1から8分の1と比較的大きい。

⑩1680年頃に皿・鉢類の高台内を蛇の目状に釉ハギする技法が始まる。

⑪、コンニヤク伴（印刷法）や型紙摺は、18世紀前半を中心に流行した装飾法である。長崎県長与町の長与窯の物原では、下層からコンニヤク伴が主で上層からは広東碗が主に出土している（高高台碗ともいう）。

⑫、広東碗（高高台）は天明ごろ（1781～88）から現れると推測される。

⑬、18世紀後半には、高台内中央を円く削り込み、その周囲の釉を蛇ノ目状に剥いだ作り（蛇の目形凹高台）の深皿・鉢類が現れる。

まとめ

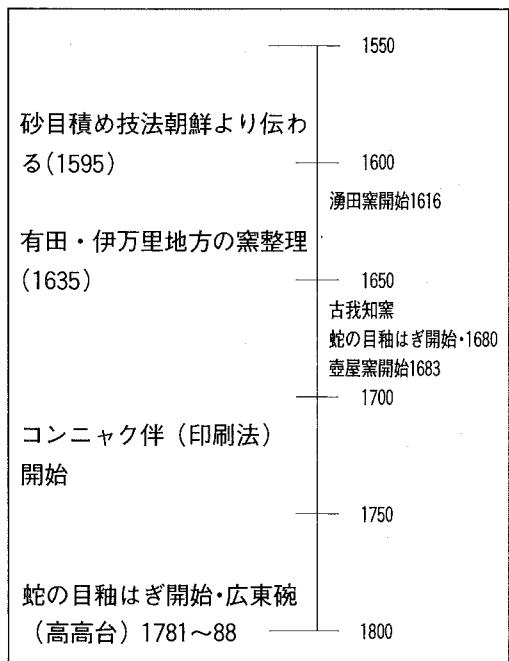
以上述べてきた各古窯採集遺物の特徴と、前述した九州における窯積め技法などとの関係で次のように考えることができる。

1) 沖縄の陶業に関する最初の記録としては、尚寧王代に佐敷王子朝昌（のちの尚豊）が1617年に薩摩・津島氏に懇願して、一六・一官・三官の三人の朝鮮人陶工を連れ帰り、那覇の湧田村に住まわせて民に陶技を伝授させたことが『球陽』に記録されている。この記録によって、沖縄における陶窯の起源1617年に、朝鮮の陶工技術が薩摩経由で沖縄に入ったことが知られる。

2) これらの記録から、1609年以後の薩摩の琉球国支配と係わって、九州の有田や唐津あたりの窯業関係の諸技術が、薩摩経由で沖縄に導入されたことは十分に考えられることである。

3) 湧田窯の開窯は、九州に砂目積めの技法が朝鮮から伝わった1598年以後のことと考えられる。

4) 今回紹介した湧田窯（壺川窯）は、筆者らがこれまでに確認した湧田窯及び他の沖縄



第4図 沖縄の古窯編年表

の古窯の製品の中にみられるトチン方による窯積めの技法は確認されていない。このことは、前述の記録にある湧田窯の開始が1617年であることとも一致する。したがって沖縄陶器の開始は、砂目積め技法が九州から伝わって以後のことであると考えられる。

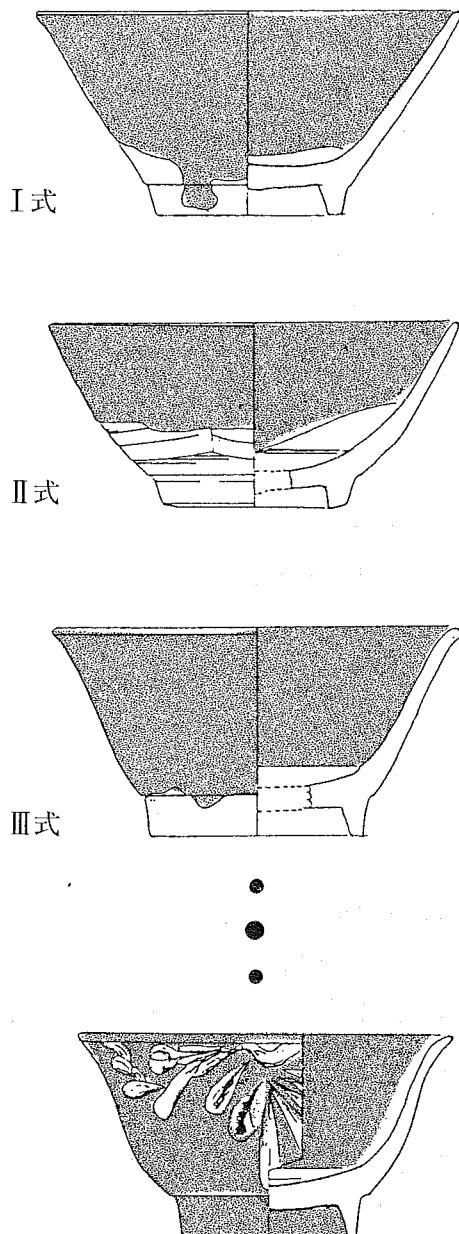
5) 今回紹介した灰釉碗の器型でみると、第5図のような編年が考えられる。このような器型からみると、湧田焼のI式が最も古く、古我知焼はそれ以後と考えられる。

古我地焼の編年については、宮城篤正氏も次のように考えている⁽¹⁴⁾。「古我地焼は、まず平田典通に始まりその弟子達に引き継がれたとの見方と、朝鮮の陶工一六、安一官、安三官の試験窯に始まるものとの見方が、もっとも可能性が高いと言えよう。いずれにしても、古我地窯は那覇の湧田窯よりは古くないように思われる」。これは、我々が今回窯跡採集の灰釉碗の器型や窯詰め技法などからだした結論と一致する。

今回紹介した灰釉碗からみると、古我知焼灰釉碗の編年的位置づけは壺屋統合の直前ごろと考えられる。前述したように、古我知焼には蛇の目釉剥ぎの碗がみられるので、少なくとも1781年までは製品が造られてことが考えられる。

6) 湧田窯の灰釉碗II式の時期には、湧田窯も壺屋窯も並行してあったことが考えられる。現在の壺屋での聞き取りでも、初期壺屋の陶工達は湧田に居住していて、そこから通っていたことが知られる。

7) 県指定の壺屋窯である南窯（フェーヌカマ）の北側に、カマニーガマと呼ばれている古い窯跡があり、ここからは湧田窯系の灰釉碗が大量に出土する。これらの碗は、第V図の70～73に紹介した灰釉碗と同類の砂目積め技法の碗である。したがって、カマ



第5図 灰釉碗の編年

ニーガマの語源は「窯の根」の意とも考えられ、壺屋統合時の窯である可能性が大きい。この窯跡は民家の屋敷内に残っており、ここを発掘調査すれば壺屋窯と湧田窯の関係がより明らかにされるとみられる。

8) 九州では、皿・鉢類の高台内を蛇の目釉はぎにする技法は、1680年ごろ開始される。これと相前後して、壺屋と古我知においてこの技法がみられることはこれらの陶業の技法が九州から沖縄へ伝えられるのが早かったことを証明している。

9) いわゆる広東高台といわれる高台は1871年以後であるが、この碗は壺屋中期頃にあらわれるとみてよい。これらのことについては、今後も課題として追求していきたい。最後に今回紹介した沖縄の各古窯から採集された当館所蔵の製品をもとに編年を考えてみたが、これらの製品はそれぞれの窯の地点での採集品である。したがって地点をちがえれば、まだ古い資料の発見される可能性があると考える。特に古我知窯についてはその可能性がある。

この小論をまとめるまでは、古我知焼の灰釉碗を湧田焼よりも古いと考えていたが⁽¹⁶⁾、今回紹介したように窯積め技法や器形からみて、古我知焼が湧田窯よりも新しいと編年する結果となった。しかしながら今回の私たちの結論は、あくまでも当館に所蔵されている採集品の範囲内にとどめておきたい。

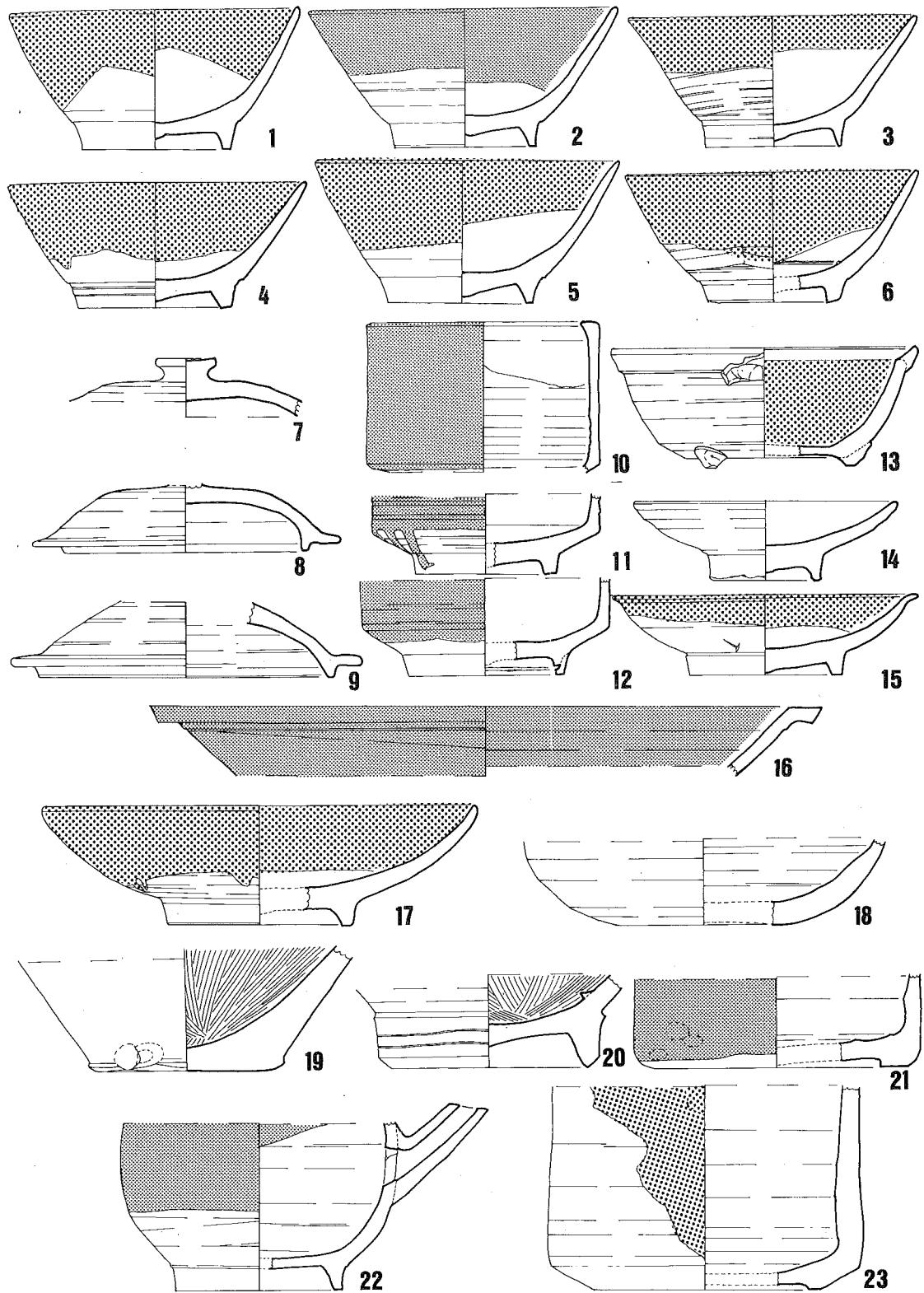
この小論をまとめるにあたって、多和田真淳、大嶺實清の両氏から多くのご教示をいただいた、厚く御礼を申しあげます。

参考または引用文献

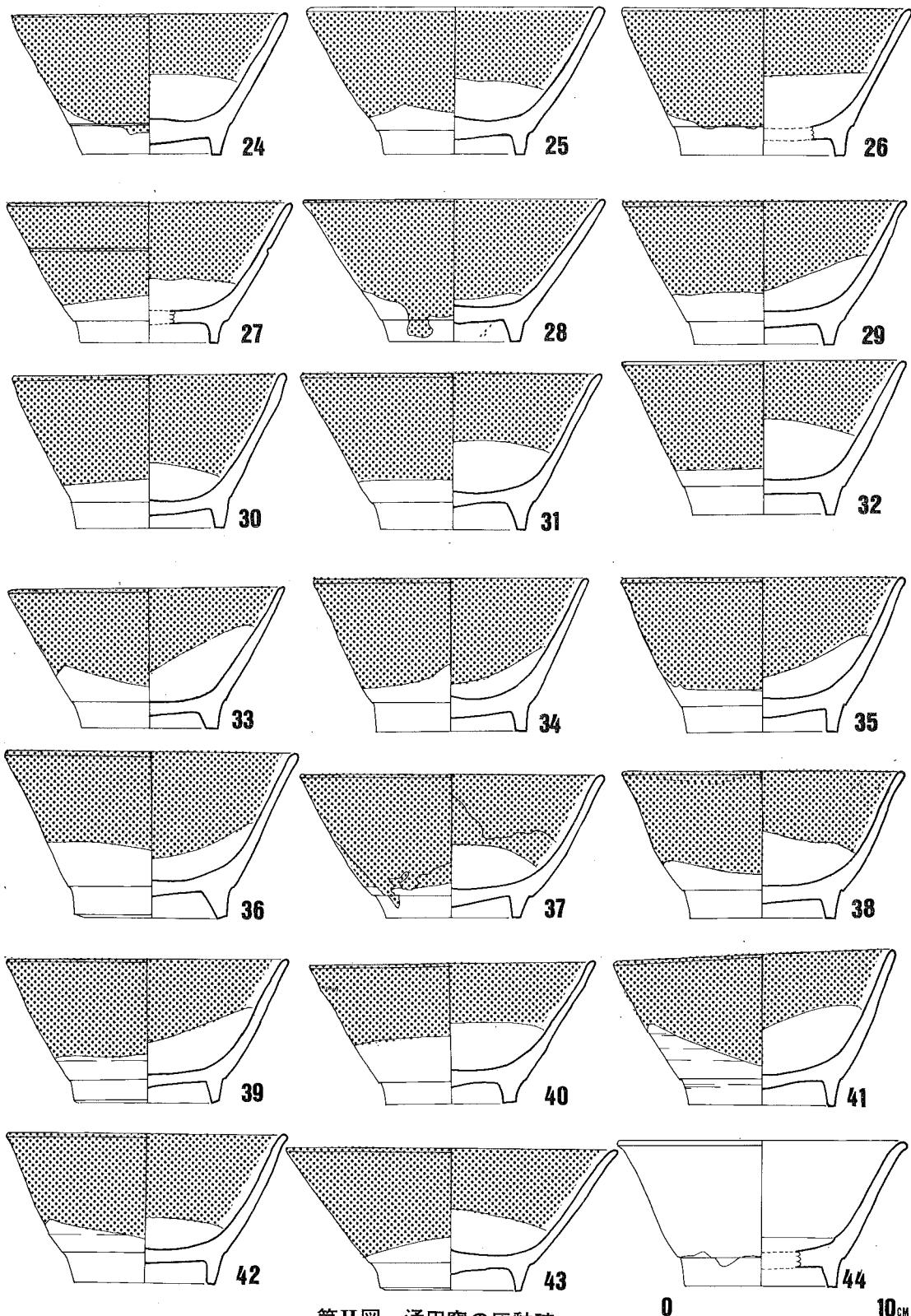
- 1) 「上・下勢頭区古墓群」北谷町文化財調査報告書第3集 北谷町教育委員会 1986年3月
- 2) 知念勇「沖縄出土の中国陶磁について」『第1回中琉歴史関係国際学術会議論文集』中琉文化経済協会主編 1987年10月
- 3) 安里進・上原政昌・家田淳一「擂鉢編年からみた近世琉球窯業の展開」『名護博物館紀要3号』名護博物館 1987年3月
- 4) 山里永吉「琉球の陶業史」『琉球の陶器』民芸業書第4号 昭和17年9月
- 5) 宮城篤正「古我知窯の全容を探る」『琉球の古陶1 古我知焼』琉球文化社 1972年10月
- 6) 比嘉朝健「琉球歴代陶工家譜上」『美術研究 第49号』昭和11年1月
- 7) 宮城篤正「壺川窯出土陶片調査略述」『琉球政府立博物館館報』琉球政府立博物館

1972年3月

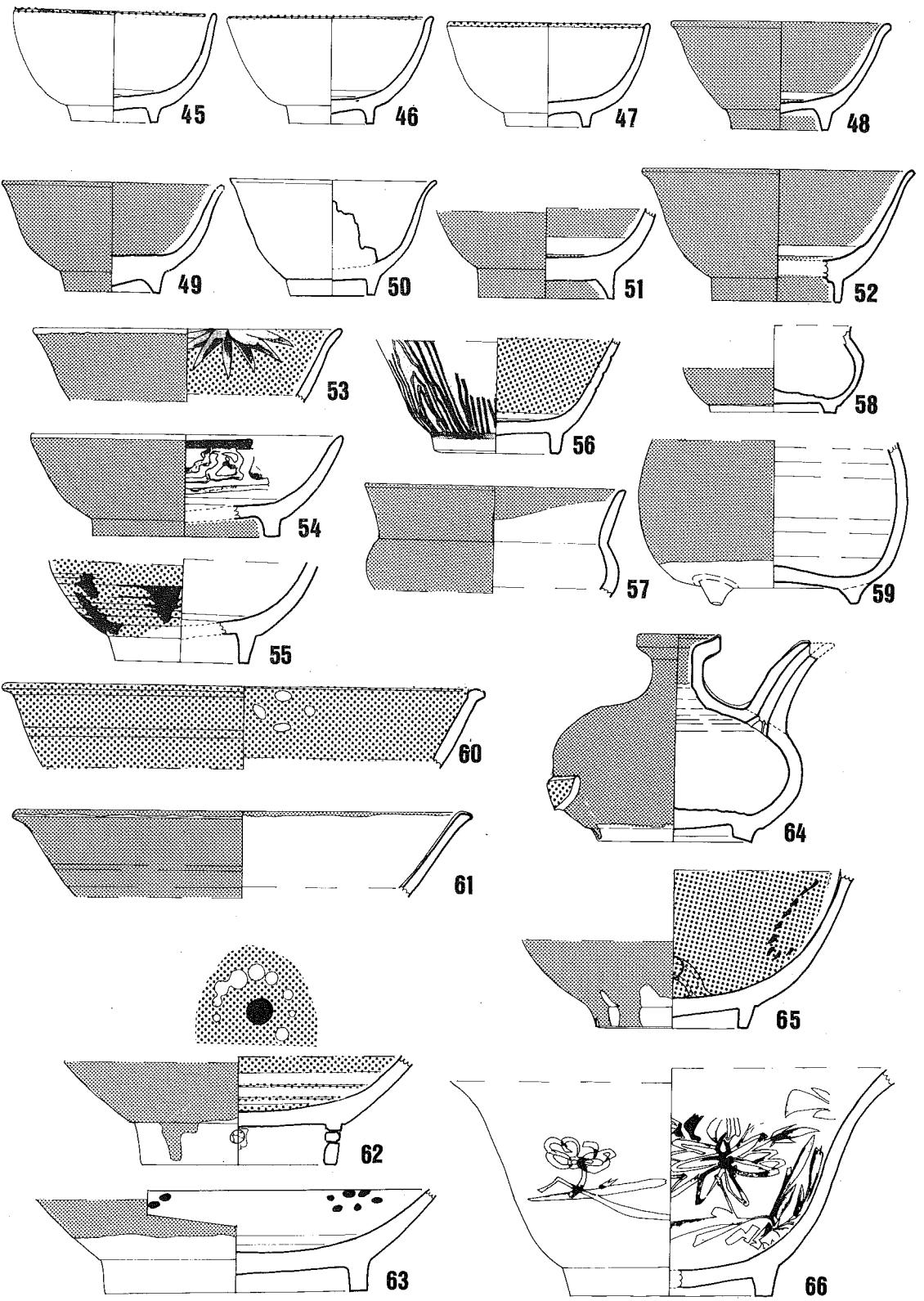
- 8) 鎌倉芳太郎『琉球文化の遺宝』(株) 岩波書店 1982年10月
- 9) 7)に同じ
- 10) 3)に同じ
- 11) 大橋康二「伊万里磁器創成期における唐津焼との関連について」『佐久間茂男教授退官記念 中国史・陶磁史論集』1983年3月
- 12) 大橋康二「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館 1984年10月
- 13) 大橋康二「肥前古窯の変遷—焼成室規模よりみた—」『佐賀県立九州陶磁文化館研究紀要第一号』佐賀県立九州陶磁文化館 1986年3月
- 14) 宮城篤正「古我知窯の全容を探る」『琉球の古陶 1 古我知焼』大城精徳・宮城篤正編著 1872年10月 琉球文化社
- 15) 3)に同じ
- 16) 星 雅彦「北部の古窯巡りから」『やちむん第10号』 やちむん会 1988年



第 I 図 古我知窯の製品

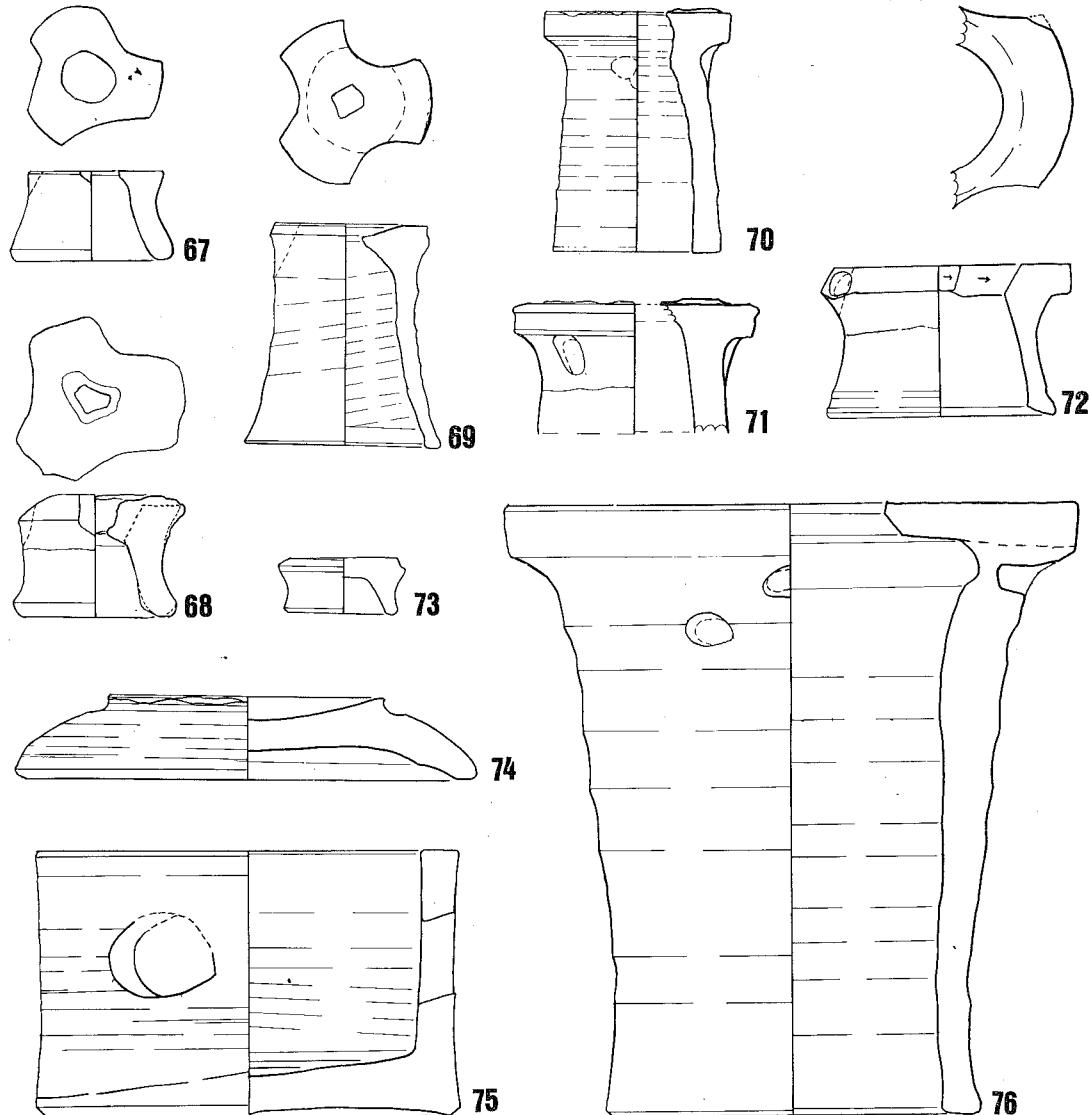


第二図 湧田窯の灰釉碗



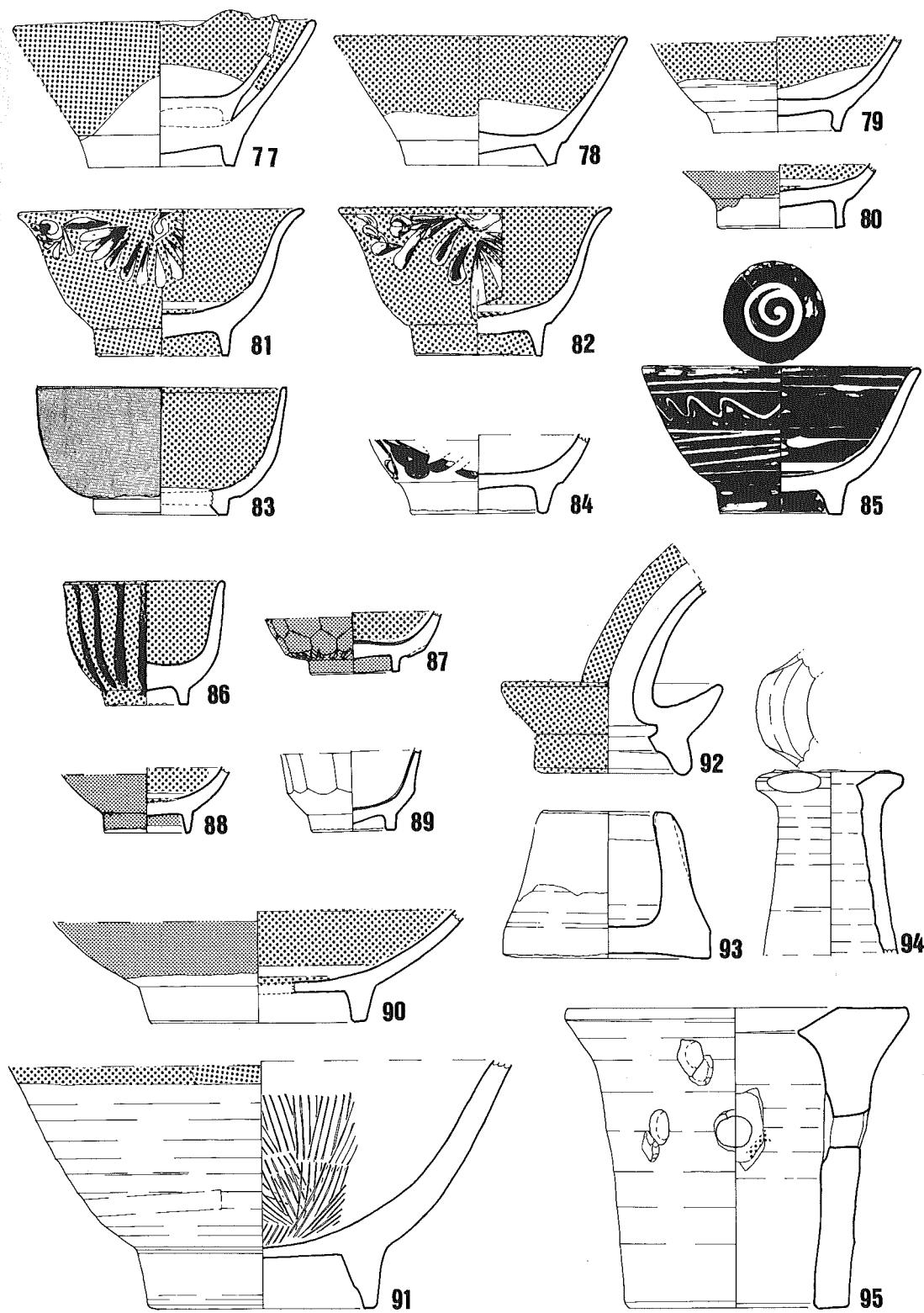
第III図 湧田窯の製品

0 10cm



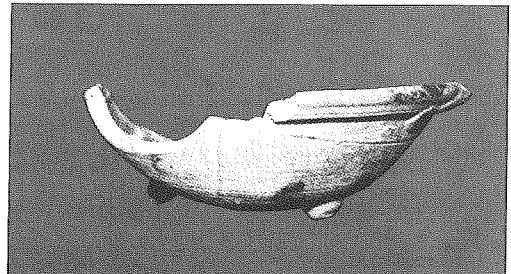
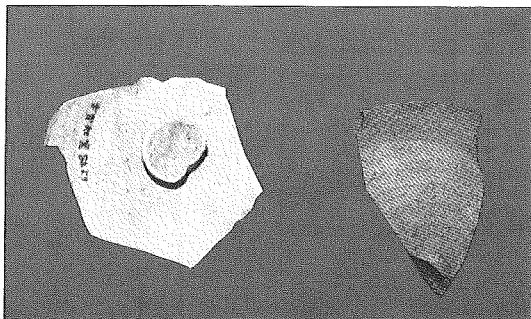
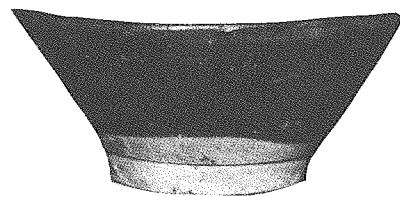
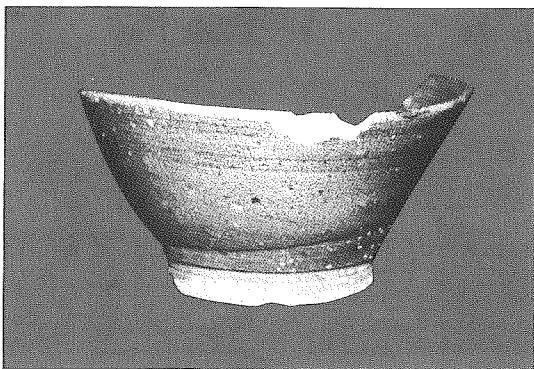
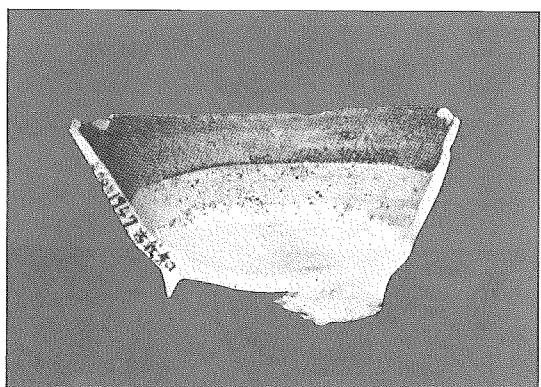
第IV図 湧田窯の窯道具

0 10 CM

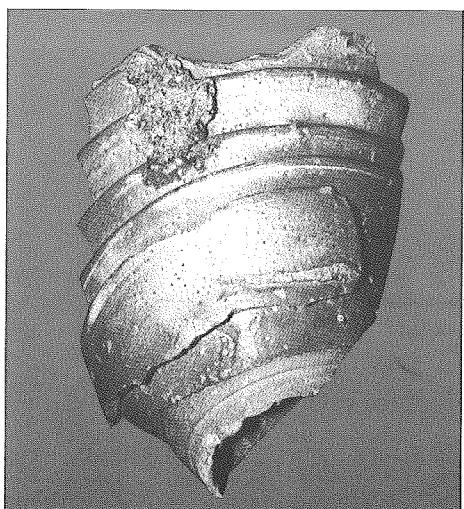
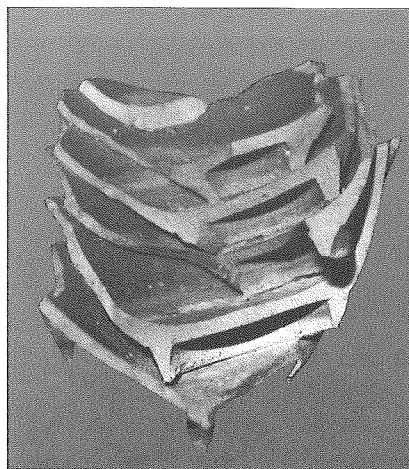
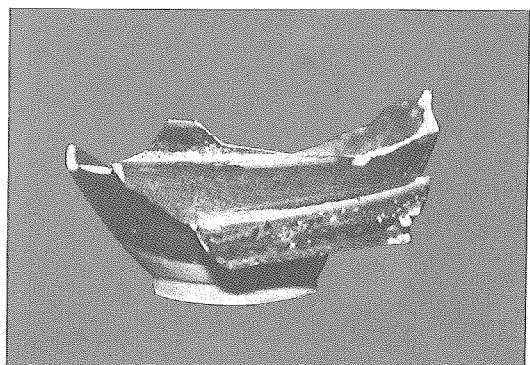
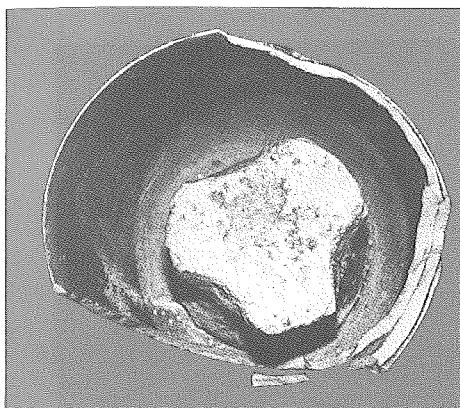
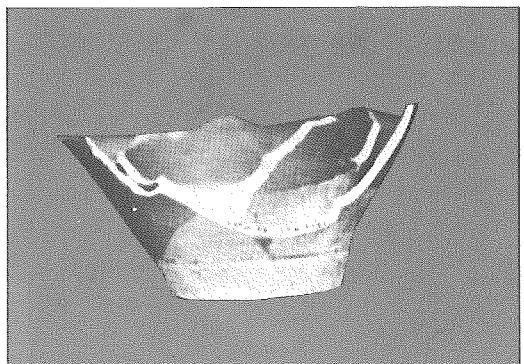
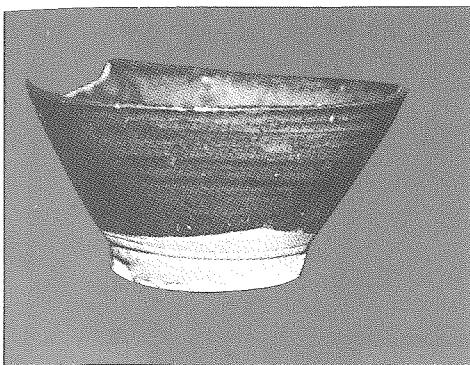


第V図 壺屋窯の製品

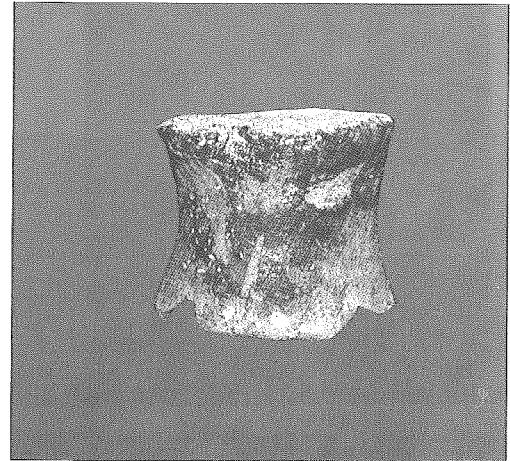
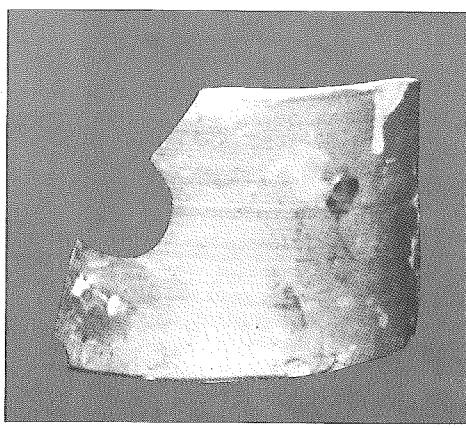
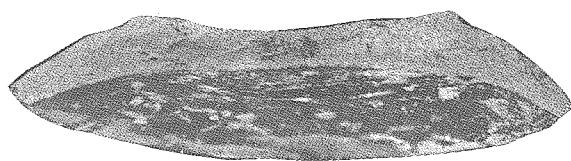
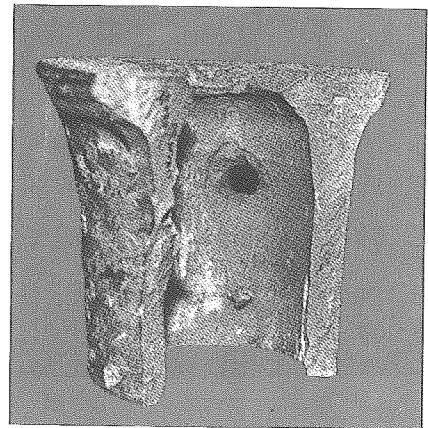
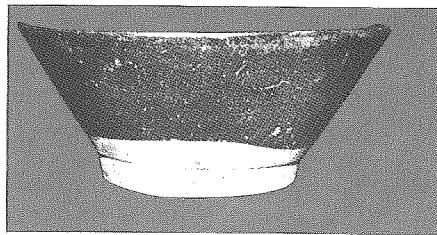
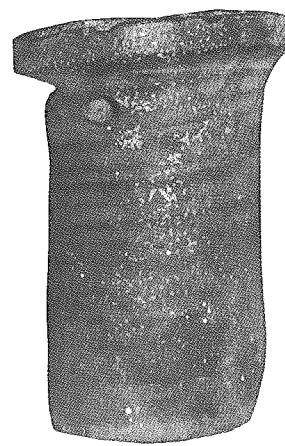
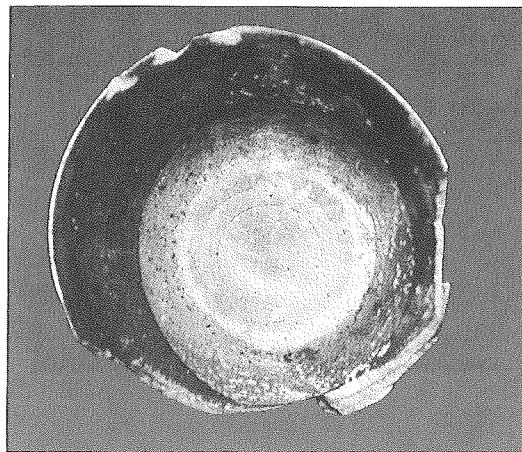
0 10 CM



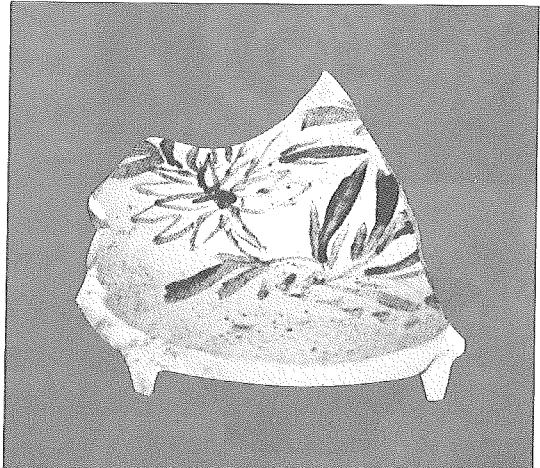
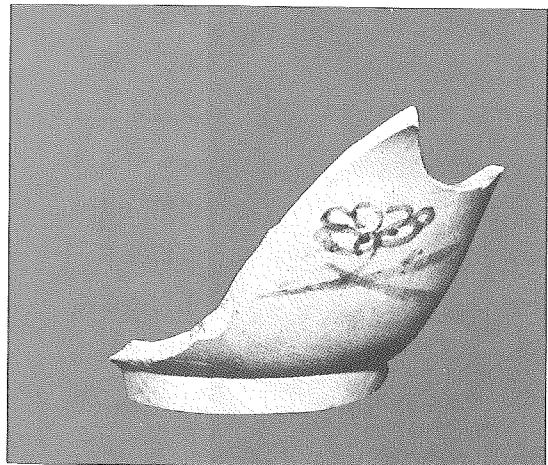
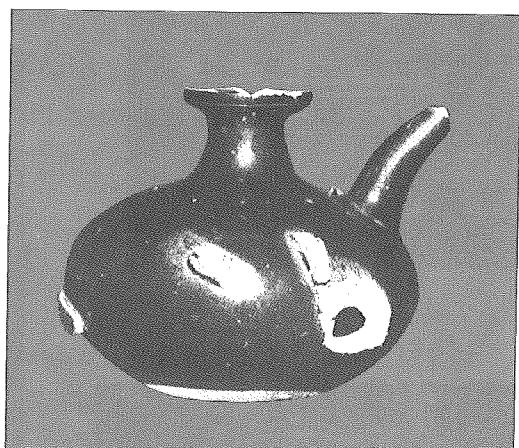
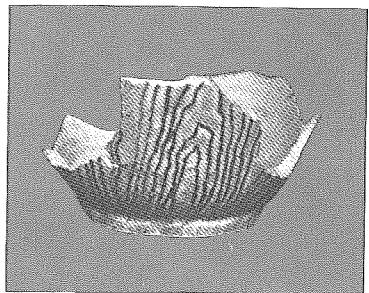
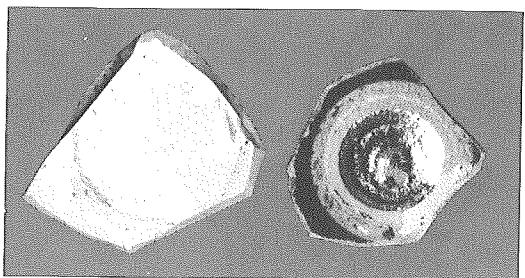
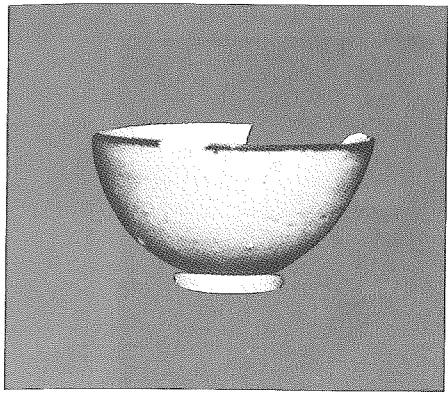
図版1 古我知窯の製品



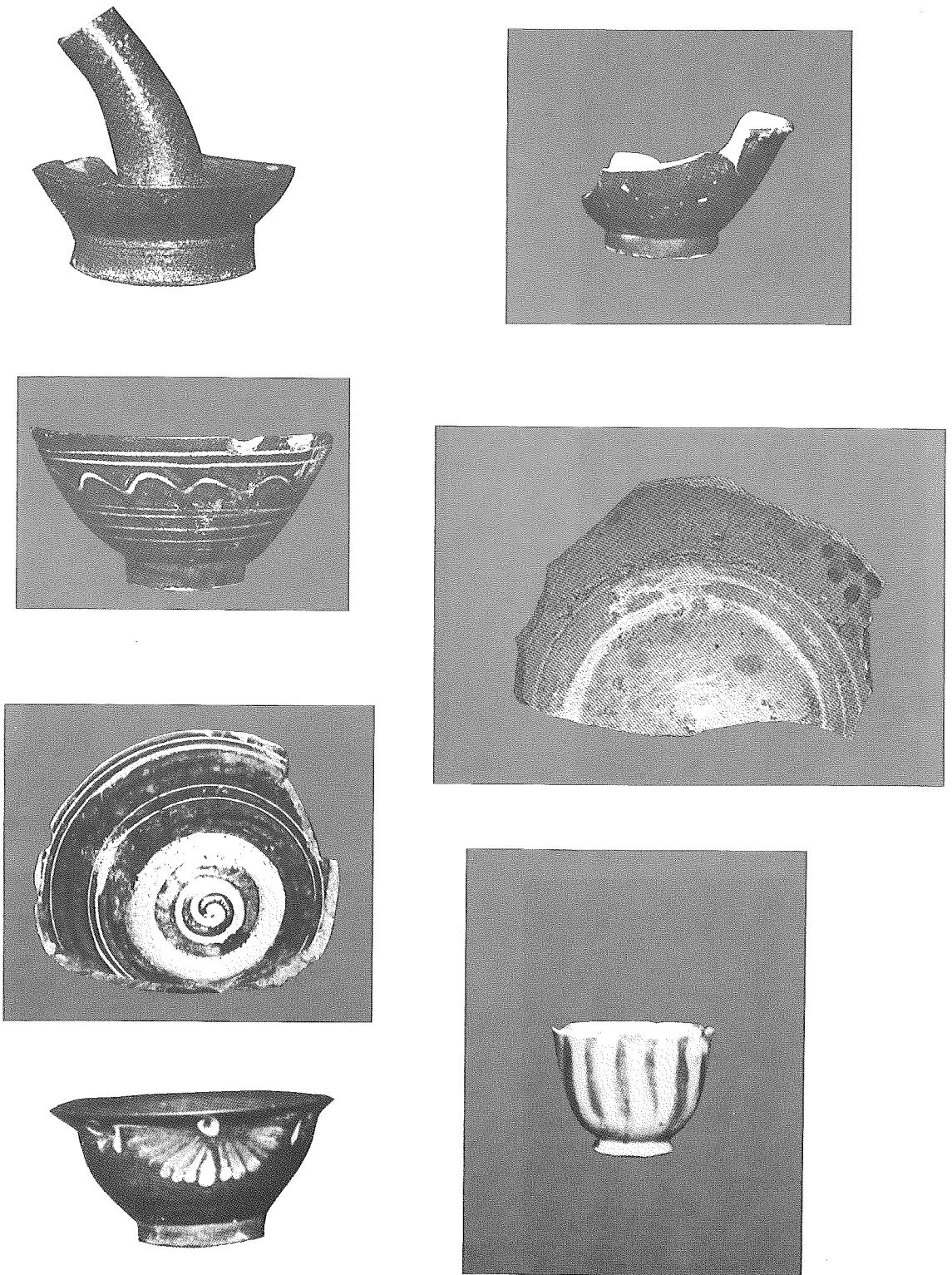
図版2 湧田窯の灰釉碗



図版3 湧田窯の灰釉碗と窯道具



図版4 湧田窯の製品



図版5 壺屋窯の製品

首里城正殿に関する建築史年譜

高 良 倉 吉

(沖縄県立博物館)

A Chronological Table on the Reconstructions of the Main Hall in Shuri Castle

Kurayoshi TAKARA

(Okinawa Prefectural Museum)

I、序 言

首里城復元の事業が目下急ピッチで進められているが、国は正殿を含む諸建造物を復元し城郭部分を公園的に整備する作業を、県は城郭外を補助公園として整備する作業をそれぞれ分担している。筆者はその中でとくに首里城正殿の復元に關係しており、これまで歴史資料を検討して復元のための情報を若干追求してきた。その成果は『首里城正殿基本設計報告書』(昭和62年3月、沖縄総合事務局開発建設部)、『首里城関係資料集』(同上)などに反映させていただいた。

筆者の关心は、500年以上の歴史をもつ首里城の変遷を文献資料を通じて把握することにあり、この変遷史と行政組織としての首里王府の推移を関連づけて理解することにおかれている。そして、当面する課題として、こうした歴史資料の中から復元に必要な情報をいかに抽出するか、というテーマを設定した。

本稿は、首里城正殿に関する建築関連資料の抜粋・要約記事を年譜的に整理したものであるが、その大半は前記報告書、資料集においてすでに紹介したものである。しかし、その後の調査による若干の補足を挿入し、今後の研究のためのタタキ台のつもりで整理・提示してみた。なお、時期は琉球処分までとし、総括的所見は年譜の後に述べる。

II、正殿関係年譜

| [年代] | [記事及び事項] |
|------------|--|
| 1392（洪武25） | ・中山王察度、数丈の高樓を建造し以て遊観に備うという。 |
| 1453（景泰4） | ・国王……朝会の時、三層殿上に坐し、群臣は冠帶を具して庭下に拝す、 という（『李朝実録』）。 ・志魯・布理の乱起り、満城火起り府庫焚焼すという。 |
| 1458（天順2） | ・万国津梁の鐘を鋳造し正殿に掛着するという。 |
| 1459（天順3） | ・尚泰久王、本國王府失火して倉庫、銅錢、貨物延焼す、と中国皇帝に報告する（『明実録』）。 |
| 1508（正徳3） | ・首里城に丹墀・石欄・龍柱をおくという。 |
| 1509（正徳4） | ・百浦添欄干之銘なる。宮殿の全面に欄干なく、青石を削り左右の基壇に 欄干を設置して中華宮殿の制にならう。また、欄干に動植物の様々な彫 刻をほどこし、その傍らに銘を刻み、尚真王の十一科の勝事を述べて以 て欄干の柱に題すという。 ・始めて丹墀に石欄・龍柱を建つという（『球陽』）。 |
| 1534（嘉靖13） | ・冊封使陳侃來琉。正殿に至れば、巍然として山の巔に在り、龍亭を正中 に設けて大封の拝礼を行う、と述べる。 |
| 1562（嘉靖41） | ・冊封使郭汝霖來琉。反って西なる者を以て正殿と為す。閣二層、上は寢 室と為す。中は朝堂となす、と述べる。 |
| 1576（万暦4） | ・天界寺火患に遇い、火勢はげしく禁中の「高世層理殿」に移焼すという （『向姓家譜』湧川家）。 |
| 1579（万暦7） | ・冊封使蕭崇業來琉。また、西に向く者七間は、此れを以て正と為す。殿 閣は二層、上は寢室と為し、中は朝堂と為す、と述べる。 |
| 1606（万暦34） | ・冊封使夏子陽來琉。正殿は閣二層にして、上は詔勅を安奉し、並びに儀 従を藏貯するの所たり。中は朝堂にして、臣下、言を伝えるのとき、閣 下の簷前に侍立す、と述べる。 |
| 1633（崇禎6） | ・冊封使徒客胡靖、「杜天使冊封琉球真記奇觀」を著し、殿前は一曠坪に して数千人を容れるべし……層閣三あり、閩省の鼓樓に類す。巍然と して高く聳え、足は雲根を躊躇う。中層は垂簾を環らす。簾は龍鳳の文を綴 る……殿前の両石龍は高さ数丈ばかりなり、と述べる。 |
| 1647（順治4） | ・向姓6世朝賢、7月6日奉神門普請奉行に任せらる。 |
| 1660（順治17） | ・9月27日子の時、倏然として火を失し、王城宮殿を焼き尽くし、王、大 美殿へ移居すという。 |
| 1661（順治18） | ・向象賢、正殿復旧の援助を薩摩に陳情するため上国す。 |

- 1662（康熙1）・向姓6世朝賢、君誇御普請総奉行に任せらる。
- ・同朝賢、10月7日西之御殿御普請総奉行に任せらる。
- ・「御城御普請中種々御物払帳」^(d)成る（散逸）。
- ・城普請につき合力米一年分の上納免除を薩摩に訴える。
- 1663（康熙2）・冊封使張学礼来琉。時に国殿未だ修造ならず、故に大美殿において冊封の礼を行うという。
- 1666（康熙5）・蘇巨昌（儀保親雲上為宜）、御城竜柱修造の命を受け、石材を求めて7月7日「安渡喜」（渡名喜）に到り、8月29日帰帆、9月3日小禄間切具志村に到り、同28日石車を求めて10月に用石を収納、起工して次年（1667）6月に竜柱を造り了える、という（『笑古漫筆』）。
- 1669（康熙8）・尚貞王即位。国殿の修造未だ成らず、故に大美殿にて即位の礼を行う。
- ・王殿を建造するのとき、使を久米島に遣わして材木を分採せしむ。久米島の夫地頭比嘉、王使の令を奉じ、民を率いて山林に入り、多くの材木を海辺に牽出し、転じて水中より牽きて船に至り、三日ならずして材木皆船に到る、という。
- 1670（康熙9）・古より国殿ならびに宮室の楼台は、皆木板を用いてこれを蓋う。今番改めて蓋うに瓦を以てし、以て壯麗鞏固を致す、という。
- ・向姓4世朝敷、御城重修惣奉行に任せられ、2月12日起工して、百浦添、ならびに左右廊下、金御殿、寄満、南風之御殿、御番所、広福門、漏刻門、瑞泉門、歓会門、首里門、内外の両番所、久慶門、右掖門、淑順門、美福門、繼世門を經營し翌年2月14日に成る。
- 1671（康熙10）・国殿を重修し、王、禁城に移る、という。
- 1673（康熙12）・向象賢、『羽地仕置』の中で、先年、城が火災に逢ったものの、藏方衰微につき作事ままならず、数年間、王府は大美御殿に平屋住居する羽目となった。再建策を講じ、三年の内に城普請は成就して、前々よりりっぱになった、と吹聴する。
- 1682（康熙21）・向姓4世朝敷、百浦添修補惣奉行に任せらる（4ヶ月）。
- ・毛姓7世盛員、8月27日百浦添修補の総奉行に任せらる（11月15日に成就す）。
- ・始めて国殿に五彩の彫甍を置く。国殿は改蓋するに瓦を以てするも、未だ彫甍を設けて以て外飾となさず。宿藍田（平田典通）、憲令を奉じ遍く四境を巡りて、五彩焼瓷の薬材を取り求め、竜頭彫甍等を製成し、始めて国殿に置き以て壯觀に備う、という。
- 1683（康熙22）・冊封使汪楫来琉。殿は西向す。殿上樓あり。王妃・宮嬪聚りて樓中に処る。上に御賜の榜書中山世土の四文字を奉じ、下に一榻の王位を設く。中に孔子像を懸く。絹色蒼勁として近代の物に非ず。此の地は王臣皆登

るを得ず。臣、御筆の在る所を以て、必ず恭しく安撫するの処を瞻んとす。是に於いて国王親ら導き、前殿の梯を以て、檻に當てて立つ。王座の稍々右を去く、と述べる。

- 1686 (康熙25) • 向姓4世向良翰、8月7日百浦添修補惣奉行に任せらる（10月26日に竣工す）。
- 1699 (康熙38) • 「御普請御修補日記」^(d)成る（散逸）。
- 1704 (康熙43) • 向姓7世朝睦、百浦添大修補により総奉行に任せらる（2月23日～翌年5月25日成就）。
• 武姓7世宗備、6月21日百浦添御普請奉行に任せらる（翌年11月成就）。
- 1709 (康熙48) • 11月18日、尚益王即位。20日丑時（午前1時～3時）に至り、国殿および南北諸殿、尽く焼燼に遭う、という。
• 「御城炎上付一巻」^(d)成る（散逸）。
- 1710 (康熙49) • 王城回祿し、宮殿を建てる事を稟明するため、向氏伊江按司朝嘉を遣わす。7月18日、薩州に到り、11月10回国す。
- 1711 (康熙50) • 「康熙五十年辛卯正月日記」所収の「重建國殿記」に、墀前の竜柱および各石欄、歴年既に久しく、或いは傾壞致し、遂に皆改めせしむ云々、とある（「笑古漫筆」）。
- 1712 (康熙51) • 向姓9世鳳彩、3月2日重修國殿総奉行に任せらる。
• 先年、王城回祿し、將に宮殿を修造せんとす。而して材木欠乏す。今、疏文を具し、薩州に求買す。是れに由りて、薩州太守吉貴公、材木一万九千五百二十五本を寄贈し、以て禁城宮殿の修造を補う、という。
- 1715 (康熙54) • 「御普請一件書類（表題欠）」^(d)成る（散逸）。
- 1718 (康熙57) • 「御普請一件書類（表題欠）」^(d)成る（散逸）。
- 1719 (康熙58) • 冊封副使徐葆光来琉。王殿九間、皆西に向かう。殿樓の上に、御書中山世土の四字の大榜を供す。即ち王宮なり。前殿の庭方広數十畝にして、左を南樓とし、北向す。右を北宮とし、南向す、と述べる。
- 1722 (康熙61) • 百浦添普請の儀、評定所において詮議さる。その要点は、百浦添は元のようにし高は下げるてもよい。君誇門は、中央は高く左右は相応に下げてよく、北京の太和門と同様でよい。石デイシおよび竜柱はこれまで通り。石デイシならびに下の御庭欄干はこれまで通り、と具申される。「此時竜柱欄干を唐に注文さるや否やについても詮議があつたが、中に此節始めての御用であれば果たして唐に於て應ずるや否やも疑問であるし、且つ船に積込も困難であるといふので決定せられなかつたやうである」という（「笑古漫筆」）。

- 1728（雍正6）・翁姓7世盛寿、百浦添御普請により命を奉じて御材木取調奉行として国頭地方に到る（7月29日～9月20日）。
- ・向姓6世朝良、百浦添大破により新たに造営のため7月5日百浦添修補奉行に任せらる。10月23日改名して百浦添普請奉行と称す。翌年1月26日起工して7月30日成る。
- 1729（雍正7）・正殿重修さる。上下の分を明らかにするため国殿の宝座を改めて正中に設け、国殿を唐坡豊と改字すという。
- 1737（乾隆2）・「山奉行所規模帳」布達さる。御本殿普請用材としてのカシノ木、ヨスノ木の伐採禁止などを述べる。
- 1747（乾隆12）・「杣山法式仕次」布達さる。御本殿普請にカシ木を用い20年に一度づつ普請してきたが、物いりゆえ、檜木普請とし、耐久性を増すべく檜木仕立方などを述べる。
- 1748（乾隆13）・「就杣山総計条々」布達さる。御本殿を20年に一度づつ雑木をもって普請してきたが、物いりゆえ、檜木調とし、檜木仕立方などを述べる。
- 1750（乾隆15）・この頃蔡温、「獨物語」を著す。御本殿を20年に一度づつ雑木をもって普請してきたため国庫の支障となったこと、この節より檜木を手広く仕立るようにしたこと、御本殿その他雑木調の御殿を皆檜木調とすることにしたこと、などを述べる。
- 1751（乾隆16）・「山奉行所公事帳」布達さる。百浦添は雑木により20年余ごとに改めてきたが、物いりゆえ、耐久性を増すべく枚・檜木調に変えることとし、よって枚・檜木仕立方などを述べる。
- 1756（乾隆21）・冊封副使周煌来琉。王殿は山頂に在り。康熙元年（1662）燬く。五十一年（1712）重建す。…殿は九間、左右夾室一、…中階は七級、石欄周護し、花鳥を雕刻して頗る工整う。殿上に樓有り、御書樓と為す。…御庭は方広數十畝、三道を分砌し、方磚之に鋪く。…殿屋は皆固樑、柱礎多く、一間に二十余柱を用うるに至る、と述べる。
- 1761（乾隆26）・「百浦添御入目惣帳」^(a, b)成る（散逸）。
- 1766（乾隆31）・中山王居宅大破につき、作替又は修補料として2,600貫文の借金を9月28日付で薩摩に願い出る。工事はその年の暮から来春にかけての予定という（『琉球館文書』）。
- 1767（乾隆32）・国王居宅普請料の借金は銀でなく銅錢でもらいたい、と2月2日付で薩摩に要請する（『琉球館文書』）。
- ・「百浦添御普請日記」^(a, b)成る（散逸）。
- 1768（乾隆33）・6月9日、午を過ぐるの時候、大地震あり。王城の石牆数十カ所、併びに三ヶ寺、玉陵・極樂陵の石牆処々、地震の壞す所となる。其の外、諸方に亦損所有り云々、という。

- 1768（乾隆33）・鄭孝德、重建百浦添記を起草す。前年9月3日に工を興し、この年2月26日柱を監し、3月12日梁に上し、6月□日を以て成を告げ、吉を19日に撰んで新殿に遷御す、という。
- ・6月26日、王殿修完するに因り、主上、大美御殿より神殿に遷る。
 - ・「百浦添御殿普請付御絵図並御材木寸法記」^(a, b, c)成る（現存）。
 - ・「百浦添御普請日記」^(d)成る（散逸）。
- 1800（嘉慶5）・冊封使李鼎元来琉。「使琉球記」の中で周煌同様の記述を掲ぐ。
- 1803（嘉慶8）・「百浦添御普請日記」（～嘉慶16）^(d)成る（散逸）。
- 1811（嘉慶16）・王殿を重修す。
- ・「百浦添御殿御普請日記」（一）^(a, b)成る（散逸）。
- 1834（道光14）・「注文扣〔下庫理方〕」^(e)成る（現存）
- 1836（道光16）・「西御殿御普請日記」^(d)成る（散逸）。
- 1839（道光19）・「図帳〔勢頭方〕」^(c)成る（現存）。
- 1842（道光22）・「百浦添御殿御普請日記」（二）^(a, b)成る（現存）。
- ・「百浦添御殿御普請日記」（三）^(a, b)成る（～道光26年、散逸）。
 - ・「百浦添御普請日記」（～道光26年）^(a, b)成る（散逸）。
- 1844（道光24）・蘇姓9世憲寛、12月18日百浦添御普請筆者となる。
- 1846（道光26）・同憲寛、9月13日百浦添普請成就につき褒賞さる。
- ・百浦添殿重修す。
- 1866（同治5）・「御冠船之時御座構之図」「御冠船之時御道具之図」^(e)成る（現存）。
- 1877（光緒3）・正殿失火あるも大事に至らず。
- 1879（明治12）・国王尚泰、王城を出て中城御殿に移る（琉球処分）。

〔年譜注〕各文書に注記されたa、b、c、d、eは以下の意味である。aは『御蔵本目録』（旧尚侯爵家所蔵）に登場するもの、bは『郷土資料目録』（戦前沖縄県立図書館所蔵）のもの、cは鎌倉芳太郎コレクション（沖縄県立芸術大学所蔵）のもの、dは『旧琉球藩評定所書類目録』（旧内務省所蔵）に登場するもの、eは沖縄県立博物館所蔵のものである。

III、正殿の変遷について

年譜を一覧すると、正殿を含む首里城全体が全焼もしくは全焼に近い被害を受けた事態が三件ある。志魯・布理の乱（1453年）の戦火による焼失、1660年9月27日の失火による全焼、1709年11月20日の焼失である。これらの焼失に対する再建事業の過程を見ると、志魯・布理の乱後の再建の年代は今のところ不明である。しかし、状況から推定して、万国

津梁の鐘が鋳造され正殿に掛着された1458年までには再建されたと見てよい。

1660年の焼失後の再建は財政的な事情により大いに困難をきわめたらしい。王府は大美御殿に仮住いを余儀なくされ、1663年の冊封、1669年の新王即位の大礼も首里城で挙行することができず、大美御殿でとりおこなわざるをえなかった。再建が実現したのは、焼失からかぞえて10年後の1671年2月14日であった。この再建にあたって尽力したのが向象賢で、とくに財政的裏付けは彼の働きによるものであったと思われる。この再建で注目すべき点が二つある。一つは、正殿のみならず首里城の施設全般が再建の対象とされたことである。これは、焼失による被害の大きさを物語ると同時に、再建の際の財政的負担の大きさを示している。二つ目は、正殿の象徴ともいべき龍柱が作り直され、いわば龍柱2世が登場したことである。龍柱は一対で、南側の1本は2個の石を、北側の1本は3個の石をつないで彫刻され、寸法は高さ1丈、角9寸8分、面の横張り9寸5分、鼻先より後に2尺1寸、後曲3尺、人中より唇先4寸5分、角の長さ1尺5分であった（比嘉朝健「琉球の石彫刻龍柱」）。いうまでもなく作者は蘇巨昌（儀保親雲上為宜）であり、1667年6月に仕上がっている（この2世龍柱の残欠は沖縄県立博物館に所蔵されている）。

1709年の焼失に対する再建は、依然として財政事情は厳しかったとはいえ、前回に比べると比較的スムースであったようだ。3年後の1712年には再建を達成しているからである。再建の具体的な事情を知る記事はないが、この時龍柱3世が誕生している。新龍柱はそれぞれ2個の石をつないで仕上げており、寸法は高さ1丈3寸、角9寸1分、埋1尺8寸、面の横張り1尺3寸3分、鼻先より後に2尺3寸、後曲3尺1寸6分、人中より唇先9寸5分、角の長さ1尺2寸6分であるから2世よりひとまわり大きいものであった。説明するまでもなく、戦前の写真等で知られ、現在沖縄県立博物館正面玄関口にあるものがこの3世龍柱である。作者は趙氏謝敷筑登之親雲上宗相であった（前掲比嘉）。

以上が主な焼失および再建の推移であるが、年譜を一覧すればおのづから明らかなように、正殿はしばしば重修・改修工事が施されている。

尚真王代の欄干の造営と龍柱（1世に相当）の設置、1682年の修補および彫甍の装飾、1686年の修補、1704年から翌年にかけての大修補（1709年の焼失は修補直後の事件であった点に注意）、1722年の普請、1728年から翌年にかけての大普請、1766年頃から1768年にかけての大修補事業、1803年の普請、1811年の重修、1842年から1846年にかけての普請、など規模の大きい修理・改築がしばしば施されている。再建のような一時的な負担はいうにおよばず、こうした定期的な建築費の支出も王府財政を圧迫したであろう。18世紀の20年代から本格的に展開される柳山管理対策は、材木需要に対応して山林資源の保全を図り、同時にまた資源の高度化を目指すものであったが、首里城正殿との関連でいえば、再建・改築用材の確保とともに、耐久年数のアップを目指すべく用材の高度化を施策として展開

したことがわかる。蔡温がいうように、雜木による20年ローテーションから檜木などの耐久材使用によるより長いローテーションへの転換、が為政者のとるべきみちであり、このような施策の背景に王府の財政事情が横たわっていたのである。

年譜をたどると、正殿は3度にわたる焼失を画期として4期に区分できると思う。1期は首里城の創建から1453年の志魯・布理の乱による焼失まで。2期は乱後の再建から1660年の焼失まで。3期は1671年の再建から1709年の焼失まで。4期は1712年の再建からすくなくとも琉球処分まで、である。すでに報道されているように、目下進められている正殿の復元は4期の正殿の復元を基本原則としている。

以上、手元にある史料にもとづいて首里城正殿に関する若干の建築史的年譜を作成してみた。参考すべき史料はまだ山ほどもあるが、いずれ補足を加えていきたいと思う。諸学兄のご教示を切に希望したい。

IV、参考文献

年譜作成にあたって以下の文献資料を参照した。主なものを列記して掲げる。

『球陽』(球陽研究会編『球陽』)、『中山世譜』(伊波普猷ほか編『琉球史料叢書』)、『李朝実録』(嘉手納宗徳編『李朝実録琉球関係史料』)、『明実録』(和田久徳編『明実録の沖縄史料』)、沖縄県教育委員会編『金石文』、『那覇市史』資料篇第1巻の3(冊封使録)、『那覇市史』資料篇第1巻の7(首里系家譜)、『沖縄県史料』前近代1。

なお作成年代が不明なため年譜に挿入できなかったが、以下の史料がかつて存在したことがわかっている。まず、『御蔵本目録』『郷土史料目録』に「百浦添御普請付勅書御迎公事帳」「百浦添御普請中日記並御造畢御祝儀公事帳」「百浦添西之御殿南風之御殿御普請並御修補日記」「百浦添御普請付木遣日記」「御寝廟御普請付惣帳」「御城中並諸所御普請御修補請取払帳」「百浦添御普請絵図日記」「百浦添御普請絵図帳」「百浦添御普請御絵図並日記」「冠船付下庫理日記」「百浦添御普請日記」などの史料名が登場する。また、『旧琉球藩評定所書類目録』にも「御普請修補帳」「御普請修補帳〔表題欠〕」「御普請修補帳〔表題欠〕」などの史料が出ている。年譜に掲げた史料同様これらの記録も散逸しており、閲覧できない点が惜しまれる。

那覇市小禄金城公園（予定地）の植物

新城 和治⁽¹⁾・日越国昭⁽²⁾

(⁽¹⁾琉球大学教育学部、⁽²⁾沖縄県立博物館)

Vegetation of Kinjoh Park (Planned Area) at Oroku, Naha City, Okinawa Island

Kazuharu SHINJO⁽¹⁾ and Kuniaki HIGOSHI⁽²⁾

(1) Biological Institute, College of Education, University of the Ryukyus

(2) Okinawa Prefectural Museum

はじめに

調査地は、那覇市小禄の字金城にある海拔36.0mを最高所とする岡である。付近一帯は、米軍基地が解放され、那覇市によって土地区画整理事業が実施されており、同事業の一環として、本調査地は公園にする予定となっている。

この調査は、植物の現況を生かした公園づくりのために、那覇市教育委員会からの依頼によって、同公園予定地の相観による現存植生図の調査、植生調査、植物相の調査を昭和61年11月に実施したものである。本報告を草するに当たり、調査に同行し協力していただいた同教育委員会の具志真孝氏に対し深甚なる謝意を表する。

I. 調査地の概況

調査地は、那覇市の南部小禄地区の西に位置している。この米軍の解放地は東、南、北側は市街地になり、西側は国道331号線を挟んで自衛隊基地、那覇空港、そして東シナ海となっている。地形的にみると、那覇市の市街地より一段高くなっている。北側の海拔47.03mを最高所とする琉球石灰岩の断層崖から徐々に南側に低くなっている。

同解放地は、解放前は米軍の住宅が点在し芝生が敷きつめられていた。本地域は、区画

整理により幅30mの那覇市内環状線、小・中・高校の各学校、3つの公園や配水場その他の公共施設、住宅地とする事業を現在実施中である。

公園予定地は、同解放地のほぼ中央部にあたり、金城中学校と那覇西高等学校に隣接している。面積は2haで、東西南北に角をもつ正方形をしており、北側と東側はやや平坦であるが、その他の部分はほぼ三角形をした平坦面より14~15mほど高い岡になっている。地質は、新生代第三紀の泥板岩および砂岩となる。

岡の最高所には、金城御嶽があり昭和45年7月29日建立の「金城御嶽神」の碑がたてられている。具志真孝氏の事前調査によると、戦前は南側の尾根の部分に「殿」、「殿の前広場」および「火の神」があったという。

植生的にみると、岡の尾根部は戦後米軍によって植えられたと思われるモクマオウが群落をなし、斜面部は回復したと思われる常緑広葉樹林に覆われ、戦前から御嶽林の一部であったと思われるリュウキュウマツの大木が点在している。また、北側と東側の斜面の一部は、以前に土砂が削り取られたが現在は草地になっている。南西斜面には畠と草地がみられる。平坦部分は、土地区画整理事業によって整地され裸地になっているが、一部には植物がみられるようになってきた。

II. 調査方法

1. 現存植生図調査

現存植生図は、調査地域内を踏査して相観によって植物群落を識別し、那覇市が同区画整理事業のために発行した2000分の1の地形図に群落の範囲を記入して作成した。

2. 植生調査

植生調査は、調査地内で識別された植物群落の中で可能な限り均質な林分を選び、最小面積以上の調査区を設置した。沖縄の高木からなる森林は、一般に樹冠をつくる一番高い層（高木層）、その次に高く樹冠に隠れるように生育する層（亜高木層）、さらに低い灌木の層（低木層）、そして一番低い草本の層（草本層）の4つの階層構造が識別できる。具体的調査にあたっては、調査区内で各階層を識別しその高さを測定するとともに、識別した各階層ごとに出現する全種類について以下に示す被度と群度を測定した。同時に調査区の面積に対する各階層の植物の葉群の被覆率、すなわち各階層の植被率を測定した。また、各調査区において植物群落に影響をおよぼすと思われる海拔高度、傾斜方位、傾斜角度、風当たり、日当たり、基盤岩類、土壤およびその乾・湿の度合などを現地で判定可能な限

り記録した。被度と群度については、Braun-Blanquet (1964) の全推定法に基づいて以下の基準で行った。

被度：調査区内の植物の種ごとの占有率を6段階で表示したもの。

- 5：調査面積の75%～100% ($3/4 \sim 1$) を占めている。
- 4：調査面積の50%～75% ($1/2 \sim 3/4$) を占めている。
- 3：調査面積の25%～50% ($1/4 \sim 1/2$) を占めている。
- 2：調査面積の10%～25% ($1/10 \sim 1/4$) を占めている。
- 1：調査面積の1%～10% ($1/100 \sim 1/10$) を占めている。
- +：調査面積の1% ($1/100$) 以下を占めている。

群度：調査区内で個々の植物がどのように生育しているかを表す測度で
次のように区分する。

- 5：調査区内にカーペット状に生育している。
- 4：カーペット状に穴があいているような状態、
または大きなまだら状に生育しているもの。
- 3：まだら状、群状に生育しているもの。
- 2：小群状に生育しているもの。
- 1：単独に生えているもの。

3. 植物相調査

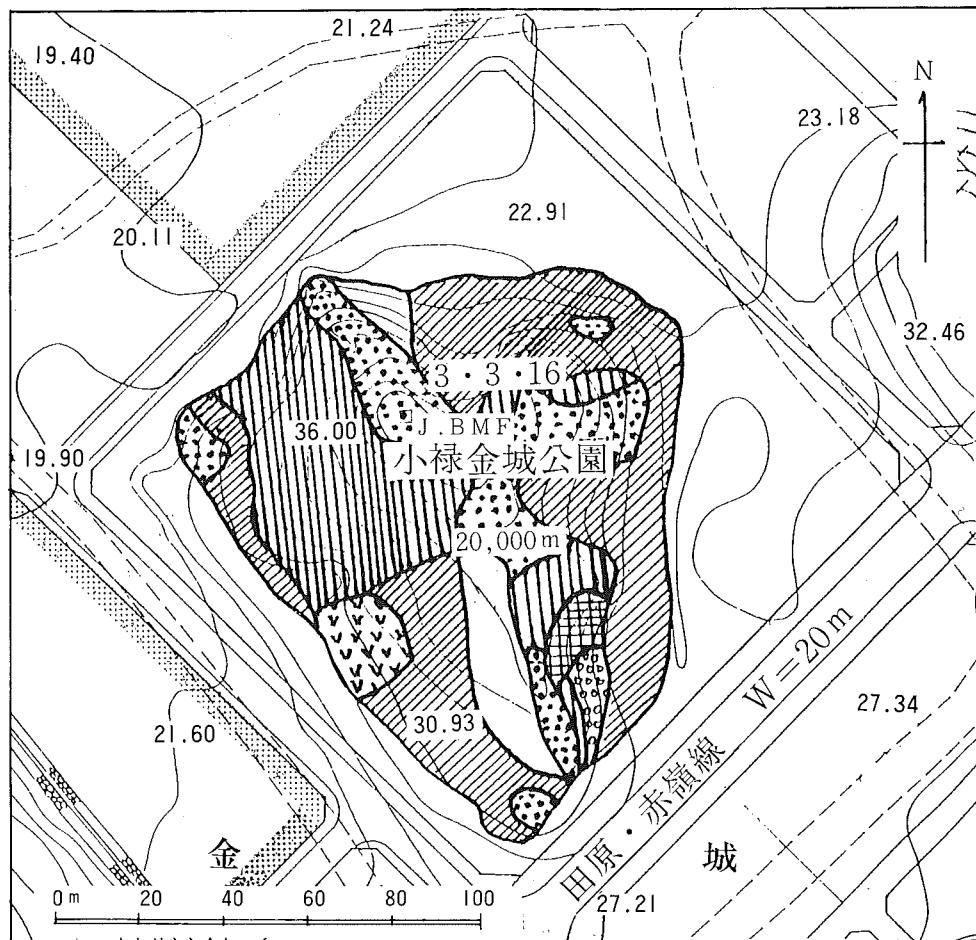
植物相の調査は、調査地域内を踏査して出現した植物の種類を記録して行った。疑問種について持帰り、同定し植物目録を作成した。

III、調査結果

1. 現存植生図

現存植生図は、植物群落の現況を地形図に示したもので、純粹の科学的研究や農業、林業への利用、ある地域の開発のための立地判断、それに自然保護・管理・復元など、特定の地域に関し多岐にわたるあらゆる計画の基礎図として作成される。

調査の結果は、図1に示すとおりである。以下その詳細について、簡単に説明する。



凡例

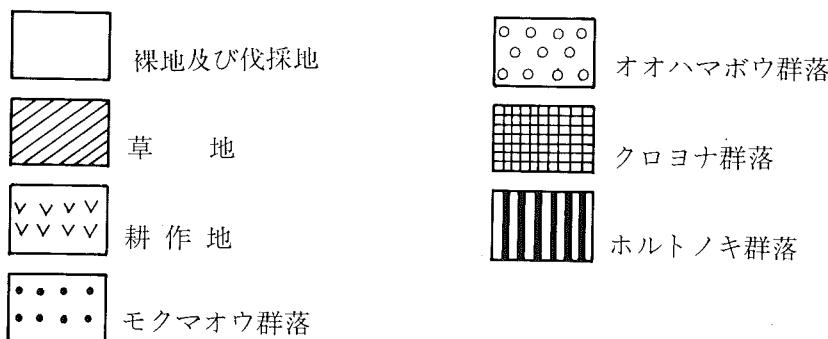


図1 那覇市首里小禄金城公園（予定地）の植生図

(1)、裸地および伐採地

岡状の部分を取り囲むように広い面積を占めている。これは、区画整理のための道路建設・整地のためである。また、南西尾根の部分は、字の方々によって「殿」およびその前広場を掃除する目的で伐採したものである。

(2)、草地

人為の搅乱がこれまで大きかった地域の目安である。草地は、東側斜面と南西側斜面の放棄畑、北側斜面と東側斜面の土砂が削り取られた部分、それに区画整理のため整地された部分の三つに分けられる。

(3)、モクマオウ群落

戦後まもない頃植えたと思われるモクマオウの群落が、尾根の高い部分と下部にみられる。これはこの地域の環境が乾燥していることの一つの指標となりうる。

(4)、畑

南西部に現在約400m²位耕作している畑がある。畑には、ジャガイモ、サトイモが植えられている。周囲にはスギ、バナナ、マンゴーなどが植栽されている。

(5)、常緑広葉樹林

西側、北側、南東側に発達している。この部分は、本地域でより人為の搅乱が小さいか、植生の回復が速い地域にみられる。そのうち西側が一番面積が広くまた大木が多い。北側は断片が残ったもので、南東側にはクロヨナ群落とオオハマボウ群落がみられる。本地域の公園化に際しては、この常緑広葉樹林を核として計画することが望ましい。

2. 植生

(1)、草地

草地については、時間の関係で今回の調査では特に南斜面の放棄畑と思われる部分についてのみ調査した。ここでは、チガヤ、ヒメオニササガヤ、リュウキュウヒメアブラススキの各群落が識別できそれを調査したのでこれらをまとめて報告する。各群落はチガヤ、ヒメオニササガヤ、リュウキュウヒメアブラススキが被度・群度とも5でもっとも優占し、2~5種出現する。チガヤ、タチシバハギは3群落に出現し、他にネズミノオ、マルバダケハギ、コゴメスゲが出現する。この3群落の他にススキ群落、タチアワユキセンダングサ群落、オヒシバ群落などがみられる。

チガヤ群落

| | | |
|----------|------------------|-----|
| 調査地番号 | 7 | 8 |
| 海抜 | 30m | |
| 傾斜方位 | s 70w | |
| 傾斜角度 | 10° | |
| 調査面積 | 1 m ² | |
| 草本層 高さ | 1 m | |
| 草本層 植被率 | 90% | |
| 出現種数 | 3 | 4 |
| 草本層 | | |
| ヒメオニササガヤ | 5.5 | 5.5 |
| タチシバハギ | 1.2 | +·2 |
| ネズミノオ | + | 1.2 |
| チガヤ | | +·2 |



図2. 調査地南部の草地

チガヤ群落

| | | |
|---------|------------------|-----|
| 調査地番号 | 9 | 10 |
| 海拔 | 30° | |
| 傾斜方位 | s 70w | |
| 傾斜角度 | 10° | |
| 調査面積 | 1 m ² | |
| 草本層 高さ | 1 m | |
| 草本層 植被率 | 90% | |
| 出現種数 | 2 | 2 |
| 草本層 | | |
| チガヤ | 5.5 | 5.5 |
| タチシバハギ | 1.2 | 1.2 |

リュウキュウヒメアブラスキ群落

| | | |
|---------------|------------------|-----|
| 調査地番号 | 11 | 12 |
| 海抜 | 30m | |
| 傾斜方位 | s 70w | |
| 傾斜角度 | 10° | |
| 調査面積 | 1 m ² | |
| 草本層 高さ | 1 m | |
| 草本層 植被率 | 90% | |
| 出現種数 | 4 | 3 |
| 草本層 | | |
| リュウキュウヒメアブラスキ | 5.5 | 5.5 |
| チガヤ | 1.2 | 2.2 |
| マルバダケハギ | 1.2 | |
| コゴメスゲ | 1.2 | |
| タチシバハギ | | 1.2 |

(2) モクマオウ群落

本群落は、高さが17~19mあり遠くからでも目だつ存在である。出現種数は、3つの調査区で61種あり、各調査区では29~40種出現した。高木層はモクマオウがもっとも優占し、他にリュウキュウマツ、チシャノキ、タイワンウオクサギ、ハマイヌビワ、ソウシジュなどが出現する。亜高木層には16種が出現し、タイワンウオクサギ、シマグワ、オオムラサキシキブなどが出現在頻度・優占度とも高い。低木層は36種出現し、ネズミモチ、シマグワ、イヌビワ、カニクサなどが優占する。草本層は46種出現するが、植被率は20~40%であり発達していない、ゲットウがもっとも優占する。この群落は乾燥している尾根に立地していることと、この群落の特性として常に乾燥した状態にあり全体的な植被率が低いため、群落内にはゲットウ、ホウロクイチゴ、ノアサガオ、アカメガシワ、タチアワユキセンダングサ、ススキ、ヘクソカズラ、ムラサキカタバミなど乾燥を好む植物や陽地性の植物が出現している。

モクマオウ群落

| 調査地番号 | 4 | 5 | 6 | 高木層 | | | |
|---------|------|------|------|------------|-----|-----|-----|
| 海抜 | | | 35m | モクマオ | 3・3 | 4・4 | 2・2 |
| 傾斜方位 | N60W | N40W | S50E | リュウキュウマツ | 2・2 | | 1・1 |
| 傾斜角度 | 20 | 20 | 15 | チシャノキ | | | 1・1 |
| 調査面積 | 225 | 225 | 225 | ソウシジュ | | | 1・1 |
| 高木層 高さ | 17 | 19 | 17 | ハマイヌビワ | | | 1・1 |
| 高木層 植被率 | 50 | 60 | 50 | タイワンウオクサギ | | | 1・1 |
| 亜高木層 高さ | 8 | 7 | 6 | 亜高木層 | | | |
| 亜高木層植被率 | 25 | 15 | 60 | タイワンウオクサギ | 1・2 | 2・2 | 1・2 |
| 低木層 高さ | 4 | 4 | 3 | シマグワ | 2・3 | 1・2 | 1・2 |
| 低木層 植被率 | 70 | 50 | 60 | オオムラサキシキブ | 1・2 | + | 2・2 |
| 草本層 高さ | 0.8 | 0.7 | 0.7 | オキナワシャリンバイ | 1・1 | | + |
| 草本層 植被率 | 20 | 40 | 20 | ハゼノキ | | + | + |
| 出現種数 | 44 | 39 | 47 | アコウ | 2・2 | | |
| | | | | ヤブニッケイ | 2・2 | | |



図3. 東側斜面のモクマオウ群落

| | | | | |
|-------------|-----|-----|------------|-------------|
| センダン | 1・2 | | ホウライチク | 1・2 |
| クチナシ | + | | ギョクシンカ | 1・2 |
| モクマオウ | + | | センダン | +・2 |
| ホソバムクイヌビワ | | 1・1 | コバノハスノハカズラ | + |
| オオバギ | | + | ノアサガオ | + |
| ホルトノキ | | + | タイワンアキグミ | + |
| モクタチバナ | | + | チシャノキ | + |
| ネズミモチ | | + | 草本層 | |
| タイワンアキグミ | | + | ゲットウ | 2・3 |
| 低木層 | | + | ヤブニッケイ | 2・3 1・2 |
| シマグワ | 2・2 | 3・3 | カニクサ | 1・2 +・2 |
| ネズミモチ | 3・3 | 2・2 | ナガミボチョウジ | +・2 +・2 +・2 |
| イヌビワ | 2・3 | 1・2 | シマグワ | +・2 +・2 +・2 |
| カニクサ | 2・3 | +・2 | ネズミモチ | +・2 +・2 +・2 |
| トベラ | 1・2 | 1・2 | トベラ | +・2 +・2 +・2 |
| ナガミボチョウジ | 1・2 | +・2 | ヤブラン | +・2 +・2 +・2 |
| オオムラサキシキブ | 1・2 | + | エダウチチヂミザサ | + +・2 +・2 |
| ヤブニッケイ | +・2 | 1・2 | ホルトノキ | + +・2 +・2 |
| ホルトノキ | +・2 | +・2 | クワズイモ | +・2 + + |
| クチナシ | +・2 | +・2 | クスノハガシワ | + + +・2 |
| クスノハガシワ | + | + | ホシダ | + + + |
| モクタチバナ | +・2 | + | ツルモウリンカ | + + + |
| カキバカンコノキ | +・2 | + | オオムラサキシキブ | + + + |
| タイワンウオクサギ | +・2 | + | ツワブキ | +・2 2・3 |
| アカテツ | + | + | イヌビワ | +・2 1・2 |
| フクマンギ | + | + | カキバカンコノキ | + + |
| ハマサルトリイバラ | + | + | ハマヒサカキ | + + |
| リュウキュウボタンズル | +・2 | | ホウロクイチゴ | + + |
| ゲッキツ | + | | モクタチバナ | +・2 + |
| オキナワシャリンバイ | + | | ギョクシンカ | + +・2 |
| オオシマコバンノキ | + | | ゲッキツ | + + |
| ハマイヌビワ | | + | オキナワシャリンバイ | + + |
| サルカケミカン | +・2 | + | クチナシ | +・2 |
| ハゼノキ | + | | コバノハスノハカズラ | + +・2 |
| マサキ | + | | ハマサルトリイバラ | + +・2 |
| ヘクソカズラ | | + | ショウロウウクサギ | + |
| フカノキ | | + | オニヤブソテツ | + |
| アカメガシワ | | + | コクテンギ | + |
| アカギ | | + | アカギ | + |

| | | | |
|-------------|---|--------------|-----|
| ススキ | + | ムラサキカタバミ | + |
| コゴメスゲ | + | ノアサガオ | +・2 |
| ソテツ | + | アカメガシワ | +・2 |
| リュウキュウボタンズル | + | タチアワユキセンダングサ | +・2 |
| オオシマコバンノキ | + | タイワンアキグミ | +・2 |
| アコウ | + | センダン | + |
| ヘクソカズラ | + | ギンネム | + |
| ツルソバ | + | | |

(3)、常緑広葉樹林

A) オオハマボウ群落

オオハマボウ群落は、沖縄では一般に海岸のアダン群落の後方すなわち陸側に立地している。本地域では、南東斜面に小面積ありそれを調査したので報告する。本群落の調査面積は100m²で、出現種数が28種、群落の高さは6mである。亜高木層・低木層・草本層の3つの階層が識別できる。亜高木層は、植被率80%で鬱蒼と茂り、オオハマボウとシマグワの2種が出現し特にオオハマボウが被度・群度とも5で優占する。低木層は、モクタチバナ、ネズミモチ、シマグワなど10種出現する。草本層は、チトセラン、ナガミボチョウジ、エダウチチヂミザサなど27種出現する。



図4. 調査地東側のオオハマボウ群落

オオハマボウ群落

調査地番号 2、海拔 35m、傾斜方位 S70E、傾斜角度 20度

| | | | |
|---------------------------|-----|-----------|-----|
| 亜高木層 (高さ 6 m、植被率 80 %) | | | |
| オオハマボウ | 5・5 | シマグワ | 1・1 |
| 低木層 (高さ 2.5 m、植被率 15 %) | | | |
| モクタチバナ | 1・2 | ネズミモチ | 1・2 |
| シマグワ | 1・2 | ヤブニッケイ | 1・2 |
| オオハマボウ | +・2 | イヌビワ | +・2 |
| ナガミボチョウジ | +・2 | オオシマコバンノキ | + |
| ホルトノキ | + | コクテンギ | + |

| 草本層 (高さ 0.8 m、植被率 30 %) | | | |
|---------------------------|-----|-------------|-----|
| チトセラン | 2・2 | ナガミボチョウジ | 1・2 |
| エダウチチヂミザサ | 1・2 | クロヨナ | +・2 |
| モクタチバナ | +・2 | ヤブニッケイ | +・2 |
| シマグワ | +・2 | ギョクシンカ | +・2 |
| オオハマボウ | +・2 | クスノハガシワ | +・2 |
| ゲットウ | +・2 | イヌビワ | + |
| ネズミモチ | + | フクマンギ | + |
| トベラ | + | オオムラサキシキブ | + |
| オオシマコバンノキ | + | タブノキ | + |
| オオバギ | + | カキバカンコノキ | + |
| オキナワシャリンバイ | + | ホルトノキ | + |
| クワズイモ | + | カニクサ | + |
| ノアサガオ | + | リュウキュウボタンズル | + |
| ハマスゲ | + | | |

B) クロヨナ群落

本群落は、前記のオオハマボウ群落に隣接する。調査面積は100m²で、樹高8.5mあり、高木層以下4つの階層が識別できる。出現種数は39種であった。高木層は植被率90%で、クロヨナ、シマグワ、コクテンギ、アコウ、オオシマコバンノキの5種が出現し、クロヨナが優占する。亜高木層は、モクタチバナなど8種が出現する。低木層は21種、草本層は26種出現するがいずれも植被率は低い。

クロヨナ群落

調査地番号 1、海拔 35 m、傾斜方位 S70E、傾斜角度 30度

| 高木層 (高さ 8.5 m、植被率 90 %) | | | |
|---------------------------|-----|------|-----|
| クロヨナ | 4・4 | シマグワ | 2・2 |
| コクテンギ | 2・2 | アコウ | 2・2 |
| オオシマコバンノキ | 1・1 | | |

| 亜高木層 (高さ 4.5 m、植被率 40 %) | | | |
|----------------------------|-----|-------------|-----|
| モクタチバナ | 2・2 | クスノハガシワ | 1・2 |
| ハマイヌビワ | 1・2 | クチナシ | 1・2 |
| シマグワ | 1・2 | ホルトノキ | +・2 |
| イヌビワ | +・2 | リュウキュウボタンズル | + |

低木層 (高さ 2m、植被率 40%)

| | | | |
|-----------|-----|-----------|-----|
| ナガミボチョウジ | 2・2 | リュウキュウチク | 1・2 |
| カニクサ | 1・2 | モクタチバナ | 1・2 |
| クチナシ | +・2 | シマグワ | +・2 |
| ヤブニッケイ | +・2 | イヌビワ | +・2 |
| ギョクシンカ | +・2 | ホルトノキ | +・2 |
| オオムラサキシキブ | + | タイワンウォクサギ | + |
| ネズミモチ | + | オオシマコバンノキ | + |
| カキバカンコノキ | + | アカテツ | + |
| タブノキ | + | ハマイヌビワ | + |
| ガジュマル | + | クスノハガシワ | + |
| ゲッキツ | + | | |

草本層 (高さ 0.7m、植被率 30%)

| | | | |
|--------------|-----|------------|-----|
| ナガミボチョウジ | 2・2 | ゲットウ | 1・2 |
| チトセラン | 1・2 | モクタチバナ | +・2 |
| ホルトノキ | +・2 | クロヨナ | +・2 |
| リュウキュウイノモトソウ | +・2 | ヤブニッケイ | +・2 |
| ホコシダ | +・2 | クワズイモ | +・2 |
| ハモオモト | +・2 | クチナシ | +・2 |
| シマグワ | + | カニクサ | + |
| イヌビワ | + | オキナワシャリンバイ | + |
| ハマサルトリイバラ | + | ゲッキツ | + |
| クスノハガシワ | + | フクマンギ | + |
| オオイタビ | + | オオシマコバンノキ | + |
| クワノハエノキ | + | | |

C) ホルトノキ群落

この群落は、本地域の西側斜面の大部分を占め、本地域で最も発達した森林である。先に報告した「上の毛」の常緑広葉樹林と同質のものである。調査面積300m²の調査区を1カ所設置して調査した。調査の結果は下表に示す。群落の高さは10mで、高木層・亜高木層・低木層・草本層の4つの階層が識別でき、46種出現した。高木層は9種が出現し、植被率は80%で、ホルトノキ、シマグワ、カキバカンコノキが被度・群度とも3で優占する。亜高木層は高さ5mで、14種出現するが被度・群度とも低く、植被率29%であり発達していない。低木層は、高さ2.5mで33種出現し、植被率70%でナガミボチョウジ、ギョクシンカ以外は各種とも被度・群度が低い。草本層は、31種出現するが植被率40%であり発達していない。

ホルトノキ群落

調査地番号 3、 海抜 35m、 傾斜方位 S40W、 傾斜角度 10度

| | | | |
|---------------------------|-----|-----------|-----|
| 高木層 (高さ 10m, 植被率 80 %) | | | |
| ホルトノキ | 3・3 | カキバカンコノキ | 3・3 |
| シマグワ | 3・3 | ヤブニッケイ | 2・2 |
| タイワンウオクサギ | 3・3 | リュウキュウマツ | 2・1 |
| ソウシジュ | 2・1 | オオバギ | 1・1 |
| タブノキ | 1・1 | | |
| 亜高木層 (高さ 5m, 植被率 20 %) | | | |
| ホルトノキ | 1・2 | ハマイヌビワ | 1・2 |
| ネズミモチ | 1・1 | コクテンギ | 1・1 |
| アコウ | 1・1 | オオムラサキシキブ | + |
| センダン | + | ハゼノキ | + |
| オオバギ | + | カキバカンコノキ | + |
| タイワンウオクサギ | + | ヤブニッケイ | + |
| シマグワ | + | ショウロウクサギ | + |
| 低木層 (高さ 2.5m, 植被率 70 %) | | | |
| ギョクシンカ | 2・3 | ナガミボチョウジ | 2・3 |
| ネズミモチ | 1・2 | イヌビワ | 1・2 |
| クチナシ | 1・2 | アカギ | 1・2 |
| カニクサ | 1・2 | オオバギ | 1・2 |
| クワズイモ | 1・2 | シマグワ | + |
| クスノハガシワ | + | ホルトノキ | + |
| トベラ | + | ホウライチク | + |
| ショウロウクサギ | + | マサキ | + |
| タイワンウオクサギ | + | ギンネム | + |
| ハマイヌビワ | + | モクタチバナ | + |
| カキバカンコノキ | + | ハゼノキ | + |
| タブノキ | + | オオムラサキシキブ | + |
| コクテンギ | + | センダン | + |
| サンゴジュ | + | アコウ | + |
| ハマヒサカキ | + | ハマサルトリイバラ | + |
| ゲッキツ | + | アカテツ | + |
| ヤブニッケイ | + | | |
| 草本層 (高さ 0.8m, 植被率 40 %) | | | |
| ナガミボチョウジ | 2・3 | クワズイモ | 1・2 |
| ギョクシンカ | 1・2 | ゲットウ | 1・2 |

| | | | |
|--------------|-------|-----------|-------|
| カニクサ | + · 2 | オオシマコバンノキ | + · 2 |
| タイワンアキグミ | + · 2 | ホシダ | + · 2 |
| ホルトノキ | + · 2 | ツルソバ | + · 2 |
| カキバカンコノキ | + · 2 | ネズミモチ | + · 2 |
| モクタチバナ | + · 2 | タブノキ | + · 2 |
| エダウチチヂミザサ | + · 2 | ハチジョウシダ | + · 2 |
| リュウキュウイノモトソウ | + · 2 | イヌビワ | + · 2 |
| トベラ | + · 2 | アカギ | + · 2 |
| ヤブニッケイ | + | クスノハガシワ | + |
| マサキ | + | オオムラサキシキブ | + |
| コクテンギ | + | ゲッキツ | + |
| ショウロウクサギ | + | クワノハエノキ | + |
| オニヤブソテツ | + | ホウロクイチゴ | + |
| ハマサルトリイバラ | + | | |

3. 植物相

昭和61年11月に行われた現地調査において、生育が確認されたものに基づいて本調査地における植物目録を作成した。本目録の学名および和名、配列は、初島住彦著「琉球植物誌 1975」、初島住彦・天野鉄夫著「琉球植物目録 1977」、島袋敬一著「琉球シダ植物目録 1981」にしたがった。今回の調査で確認されたシダ植物以上の維管束植物の数は、57科112属130種（亜種、変種、品種、園芸種を含む）で、その分類別統計は表1のとおりである。これには自生種と畑に植えられているもの、およびその周辺に植栽されているも

表1. 那覇市小禄金城公園（予定地）に生育する植物の分類別統計。

| | 科 | 属 | 種 | 亜種 | 変種 | 品種 |
|-------|----|-----|-----|----|----|----|
| シダ植物 | 5 | 5 | 7 | | | |
| 種子植物 | | | | | | |
| 裸子植物 | 3 | 3 | 3 | | | |
| 被子植物 | 49 | 104 | 98 | 1 | 16 | 5 |
| 双子葉植物 | 42 | 79 | 71 | 1 | 14 | 5 |
| 離弁花類 | 28 | 46 | 45 | 1 | 6 | 4 |
| 合弁花類 | 14 | 33 | 26 | | 8 | 1 |
| 單子葉植物 | 7 | 25 | 27 | | 2 | |
| 合 計 | 57 | 112 | 108 | 1 | 16 | 5 |

のも含まれている。本地域は現在、区画整理中であり裸地も多く、今後その種数は増加していくものと考えられる。

おわりに

本公園の設計にあたっては、単に市街地の都市公園としての機能のみを考慮して計画をたてるのではなく、当該地に隣接して新設の小・中・高校があり、その学習環境として、また郷土の自然を学習し生徒自らその保護の重要性を理解する場としての公園にすることが望ましい。そのためには、現在ある自然林を最大限に生かした公園にすべきである。

引用文献

- 初島住彦, 1975. 琉球植物誌 追加・改訂版。 沖縄生物教育研究会, 沖縄。
- 初島住彦・天野鉄夫, 1977. 琉球植物目録。 でいご出版社, 沖縄。
- 島袋敬一, 1981. 琉球シダ植物目録。 ひるぎ社, 沖縄。
- 日越国昭・新城和治, 1987. 那覇市小禄金城俗称「上の毛」の植物。 沖縄県立博物館
紀要, 第13号, 1-12.

那覇市小禄金城公園（予定地）の植物目録

| | |
|--|------------------------|
| | Pteridophyta シダ植物 |
| | Schizaeaceae フサシダ科 |
| <i>Lygodium japonicum</i> (Thunb.) Swartz | カニクサ |
| | Pteridaceae イノモトソウ科 |
| <i>Pteris ensiformis</i> Burmann | ホコシダ |
| <i>P. fauriei</i> Hieronymus | ハチジョウシダ |
| <i>P. ryukyuensis</i> Tagawa | リュウキュウイノモトソウ |
| | Aspleniaceae チャセンシダ科 |
| <i>Asplenium australasicum</i> (J. Sm.) Hooker | ミナミタニワタリ |
| | Dryopteridaceae オシダ科 |
| <i>Cyrtomium falcatum</i> (Linn. fil.) Presl | オニヤブソテツ |
| | Thelypteridaceae ヒメシダ科 |
| <i>Thelypteris acuminata</i> (Hourtt.) Morton | ホシダ |
| | Spermatophyta 種子植物 |
| | Gymnospermae 裸子植物 |
| | Cycadaceae ソテツ科 |
| <i>Cycas revoluta</i> Thunb. | ソテツ |
| | Taxodiaceae スギ科 |
| <i>Cryptomeria japonica</i> D. Don | スギ |
| | Pinaceae マツ科 |
| <i>Pinus luchuensis</i> Mayr | リュウキュウマツ |
| | Angiospermae 被子植物 |
| | Dicotyledoneae 双子葉植物 |
| | Archichlamydeae 離弁花類 |
| | Casuarinaceae モクマオウ科 |
| <i>Casuarina equisetifolia</i> J. R. & G. Forst. | モクマオウ |
| | Ulmaceae ニレ科 |
| <i>Celtis boninensis</i> Koidz. | クワノハエノキ |
| | Moraceae クワ科 |
| <i>Ficus ampelas</i> Burm. f. | ホソバムクイヌビワ |
| <i>F. erecta</i> Thunb. | イヌビワ |
| <i>F. microcarpa</i> L. f. | ガジュマル |

| | |
|--|-----------------------|
| <i>Ficus pumila</i> L. | オオイタビ |
| <i>F. superba</i> (Miq.) Miq. var. <i>japonica</i> Miq. | アコウ |
| <i>F. virgata</i> Reinw. ex Blume | ハマイヌビワ |
| <i>Morus australis</i> Poir. | シマグワ |
| | Urticaceae イラクサ科 |
| <i>Boehmeria nivea</i> (L.) Gaudich. f. <i>viridula</i> (Yamamoto) Hatusima | ノカラムシ |
| | Polygonaceae タデ科 |
| <i>Polygonum chinense</i> L. | ツルソバ |
| | Amaranthaceae ヒユ科 |
| <i>Achyranthes aspera</i> L. var. <i>rubro-fusca</i> Hook. f. | ムラサキイノコヅチ |
| <i>Alternanthera ficoides</i> R. Br. var <i>bettzickiana</i> Backer | ケツルノゲイトウ |
| | Ranunculaceae キンポウゲ科 |
| <i>Clematis grata</i> Wall. var <i>ryukyuensis</i> Tamura | リュウキュウボタンヅル |
| | Menispermaceae ツヅラフジ科 |
| <i>Stephania japonica</i> Miers var <i>australis</i> Hatusima | コバノハスノハカズラ |
| | Lauraceae クスノキ科 |
| <i>Cinnamomum japonicum</i> Sieb. | ヤブニッケイ |
| <i>Persea thunbergii</i> (S. et Z.) Kostermans | タブノキ |
| | Pittosporaceae トベラ科 |
| <i>Pittosporum tobira</i> (Thunb.) Aiton | トベラ |
| | Rosaceae バラ科 |
| <i>Prunus campanulata</i> Maxim. | ヒカンザクラ |
| <i>Rhaphiolepis indica</i> (L.) Lindl. var. <i>insularis</i> Hatusima | オキナワシャリンバイ |
| <i>Rubus parvifolius</i> L. | ナワシロイチゴ |
| <i>R. sieboldii</i> Blume | ホウロクイチゴ |
| | Leguminosae マメ科 |
| <i>Acacia confusa</i> Merr. | ソウシヅュ |
| <i>Alysicarpus nummularifolius</i> DC. | マルバダケハギ |
| <i>Desmanthus virgatus</i> Willd | タチクサネム |
| <i>Desmodium canum</i> Schinz & Thellung | タチシバハギ |

| | |
|--|-----------------------|
| <i>Desmodium triflorum</i> DC. | ハイマキエハギ |
| <i>Lespedeza cuneata</i> G. Don | メドハギ |
| <i>Leucaena leucocephala</i> (Lamk.) de Wit | ギンネム |
| <i>Mimosa pudica</i> L. | オジギソウ |
| <i>Pongamia pinnata</i> (L.) Pierre | クロヨナ |
| | Oxalidaceae カタバミ科 |
| <i>Oxalis corniculata</i> L. | カタバミ |
| <i>O. corymbosa</i> DC. | ムラサキカタバミ |
| | Rutaceae ミカン科 |
| <i>Murraya paniculata</i> (L.) Jack | ゲッキツ |
| <i>Toddalia asiatica</i> (L.) Lam. | サルカケミカン |
| | Meliaceae センダン科 |
| <i>Melia azedarach</i> L. | センダン |
| | Euphorbiaceae トウダイグサ科 |
| <i>Bischofia javanica</i> Blume | アカギ |
| <i>Breynia officinalis</i> Hemsl. | オオシマコバンノキ |
| <i>Glochidion zeylanicum</i> (Gaertn.) A. Juss. | カキバカンコノキ |
| <i>Macaranga ranarius</i> (L.) Muell. -Arg. | オオバギ |
| <i>Mallotus japonicus</i> Mull. -Arg. | アカメガシワ |
| <i>M. philippensis</i> (Lam.) Mull. -Arg. | クスノハガシワ |
| | Anacardiaceae ウルシ科 |
| <i>Mangifera indica</i> L. | マンゴー |
| <i>Rhus succedanea</i> L. | ハゼノキ |
| | Celastraceae ニシキギ科 |
| <i>Euonymus japonicus</i> Thunb. | マサキ |
| <i>E. tanakae</i> Maxim. | コクテンギ |
| | Aceraceae カエデ科 |
| <i>Acer oblongum</i> Wall ssp. <i>itoanum</i> Hatusima | クスノハカエデ |
| | Elaeocarpaceae ホルトノキ科 |
| <i>Elaeocarpus sylvestris</i> (Lour.) Poir. | ホルトノキ |
| | Malvaceae アオイ科 |
| <i>Hibiscus tiliaceus</i> L. | オオハマボウ |
| | Theaceae ツバキ科 |
| <i>Eurya emarginata</i> (Thunb.) Makino | ハマヒサカキ |

| | | |
|---|----------------|------------|
| | Guttiferae | オトギリソウ科 |
| <i>Calophyllum inophyllum</i> L. | | テリハボク |
| | Elaeagnaceae | グミ科 |
| <i>Elaeagnus thunbergii</i> Serv. | | タイワンアキグミ |
| | Alangiaceae | ウリノキ科 |
| <i>Alangium chinense</i> Rehd ver. <i>nipponicum</i> Masam. | | シマウリノキ |
| | Myrtaceae | フトモモ科 |
| <i>Psidium guajava</i> L. | | バンジロウ |
| | Araliaceae | ウコギ科 |
| <i>Schefflera octophylla</i> (Lour.) Harms | | フカノキ |
| | Umbelliferae | セリ科 |
| <i>Centella asiatica</i> (L.) Urban | | ツボクサ |
| | Matachlamydeae | 合弁花類 |
| | Myrsinaceae | ヤブコウジ科 |
| <i>Ardisia sieboldii</i> Miq. | | モクタチバナ |
| <i>Maesa tenera</i> Mez | | シマイズセンリョウ |
| | Primulaceae | サクラソウ科 |
| <i>Anagallis arvensis</i> L. f. <i>caerulea</i> Baumg. | | ルリハコベ |
| | Sapotaceae | アカテツ科 |
| <i>Planchonella obovata</i> (R. Br.) Pierre | | アカテツ |
| | Ebenaceae | カキノキ科 |
| <i>Diospyros ferrea</i> Bakh. | | リュウキュウコクタン |
| | Oleaceae | モクセイ科 |
| <i>Ligustrum japonicum</i> Thunb. | | ネズミモチ |
| | Asclepiadaceae | ガガイモ科 |
| <i>Tylophora tanakae</i> Maxim. | | ツルモウリンカ |
| | Convolvulaceae | ヒルガオ科 |
| <i>Ipomoea acuminata</i> (Vahl) Roem. et Schult. | | ノアサガオ |
| | Boraginaceae | ムラサキ科 |
| <i>Ehretia acuminata</i> R. Br. var. <i>obovata</i> Johnst. | | チシャノキ |
| <i>E. microphylla</i> Lamk. | | フクマンギ |
| | Verbenaceae | クマツヅラ科 |
| <i>Callicarpa japonica</i> Thunb. | | オオムラサキシキブ |
| var. <i>luxurians</i> Rehd. | | |
| <i>Clerodendron trichotomum</i> Thunb. | | ショウロウクサギ |
| var. <i>esculentum</i> Makino | | |

| | |
|--|---------------|
| <i>Lantana camara</i> L. var. <i>aculeata</i> Moldenke | ランタナ |
| <i>Phyla nodiflora</i> Greene | イワダレソウ |
| <i>Premna corymbosa</i> (Burm. f.) Rottb. et Willd. var. <i>obtusifolia</i> (R. Br.) Fletcher | タイワンウォクサギ |
| <i>Verbena officinalis</i> L. | クマツヅラ |
| <i>Vitex trifolia</i> L. | ミツバハマゴウ |
| Solanaceae | ナス科 |
| <i>Solanum alatum</i> Moench. | テリミノイヌホウズキ |
| Plantaginaceae | オオバコ科 |
| <i>Plantago asiatica</i> L. | オオバコ |
| Rubiaceae | アカネ科 |
| <i>Gardenia jasminoides</i> Ellis | クチナシ |
| <i>Paederia scandens</i> (Lour.) Merr. | ヘクソカズラ |
| <i>Psychotria manillensis</i> Bartl. ex DC. | ナガミボチョウジ |
| <i>Tarenna gyokushinkwa</i> Ohwi | ギョクシンカ |
| Caprifoliaceae | スイカズラ科 |
| <i>Viburnum odoratissimum</i> Spr. | サンゴジュ |
| var. <i>awabucki</i> (Koch) K. Koch | |
| Compositae | キク科 |
| <i>Ageratum boustonianum</i> Mill. | ムラサキカッコウアザミ |
| <i>Aster subulatus</i> Michx. | ホウキギク |
| <i>Bidens pilosa</i> L. var. <i>radiata</i> Sherff | タチアワユキセンダングサ |
| <i>Blumea lacera</i> DC. var. <i>blumei</i> DC. | サケバコウゾリナ |
| <i>Cirsium brevicaule</i> A. Gray | シマアザミ |
| <i>Emilia sonchifolia</i> A. DC. | ウスベニニガナ |
| <i>Erigeron canadensis</i> L. | ヒメムカシヨモギ |
| <i>E. sumatrensis</i> Retz. | オオアレチノギク |
| <i>Farfugium japonicum</i> (L.) Kitamura | ツワブキ |
| <i>Lactuca indica</i> L. | アキノノゲシ |
| <i>Youngia japonica</i> (L.) DC. | オニタビラコ |
| Monocotyledoneae | 单子葉植物 |
| Gramineae | イネ科 |
| <i>Bambusa multiplex</i> (Lour.) Rauschel | ホウライチク |
| <i>Bothriochloa parviflora</i> Ohwi var. <i>spicigera</i> Ohwi | リュウキュウヒメアブラスキ |

| | |
|---|-----------------------|
| <i>Brachiaria mutica</i> (Forsk.) Stapf | バラグラス |
| <i>Dichanthium annulatum</i> Stapf | ヒメオニササガヤ |
| <i>Echinochloa colona</i> Link | ワセビエ |
| <i>Eleusine indica</i> Gaertn. | オヒシバ |
| <i>Imperata cylindrica</i> Beauv. var. <i>major</i> | チガヤ |
| (Nees) C. H. Hubbard et Vaughan | |
| <i>Misanthus sinensis</i> Anders. | スキ |
| <i>Oplismenus compositus</i> (L.) Beauv. | エダウチチヂミザサ |
| <i>Panicum repens</i> L. | ハイキビ |
| <i>Paspalum conjugatum</i> Berg. | オガサワラスズメノヒエ |
| <i>P. urvillei</i> Steud. | タチスズメノヒエ |
| <i>Pleioblastus linearis</i> (Hack.) Nakai | リュウキュウチク |
| <i>Sporobolus fertilis</i> (Steud.) W. D. Clayton | ネズミノオ |
| <i>Zoysia japonica</i> Steud. | シバ |
| | Cyperaceae カヤツリグサ科 |
| <i>Carex brunnea</i> Thunb. | コゴメスゲ |
| <i>Cyperus brevifolius</i> Hassk. | アイダクグ |
| <i>C. polystachyos</i> Rottb. | イガガヤツリ |
| <i>C. rotundus</i> L. | ハマスゲ |
| <i>Fimbristylis dichotoma</i> Vahl | クグテンツキ |
| <i>F. ovata</i> Kern | ヤリテンツキ |
| | Araceae サトイモ科 |
| <i>Alocasia odora</i> (Roxb.) C. Koch | クワズイモ |
| | Liliaceae ユリ科 |
| <i>Dianella ensifolia</i> L. | キキョウラン |
| <i>Liriope tawadae</i> Ohwi | ヤブラン |
| <i>Sansevieria nilotica</i> Bak. | チトセラン |
| <i>Smilax sebeana</i> Miq. | ハマサルトリイバラ |
| | Amaryllidaceae ヒガンバナ科 |
| <i>Crinum asiaticum</i> L. | ハマオモト |
| | Musaceae バショウ科 |
| <i>Musa × sapientum</i> L. | バナナ |
| | Zingiberaceae ショウガ科 |
| <i>Alpinia speciosa</i> (Wendl.) K. Schum. | ゲットウ |

多良間島の両生爬虫類について — サキシママダラの採集例とヌマガエルの移入 —

千木 良芳 範
(沖縄県立博物館)

On the Herpetological Fauna of the Tarama Island, the Miyako Islands
Additional Records of the Snake *Dinodon rufozonatus walli*

Yoshinori CHIGIRA
(Okinawa Prefectural Museum)

I、はじめに

宮古諸島は琉球列島の南西部に位置し、宮古島、伊良部島、下地島、池間島、来間島、大神島、多良間島、及び水納島からなる。これらの島々の両生爬虫類について、いくつかの報告があるが、ほとんどは宮古島に限られたものである。多良間島はもちろんのこと、それ以外の島々を含めたような調査は少ない。わずかに高良（1962）と当山（1976、1981）が知られているだけである。

筆者は1987年6月4日から9日まで、沖縄県立博物館主催の移動博物館の準備・開催のため多良間島を訪れた。わずかな滞在期間ではあったが、島の各所を踏査し、両生爬虫類について観察することができた。その中で、サキシママダラの標本が多良間村教育委員会に保存されていることを知り、その標本を見る機会を得た。また多良間島のヌマガエルについては、当山（1973）が宮古島からの移入である旨を記しているが、今回その詳細についても聞くことができた。これらのことと含めて、ここに報告する。

最後に、本調査において標本の借り出しや情報提供など、様々な点で便宜を図っていた友利哲一氏および多良間村教育委員会の皆様、ヌマガエルについての貴重な示唆をいただいた大山春翠氏に対し深謝の意を表す。

II、調査地の概要および調査方法

多良間島は水納島と共に多良間村を構成する島で、宮古島と石垣島のほぼ中間に位置している。面積がおよそ18.8km²で、周囲が約16.2kmになるほぼ橢円形をした島である。全体的に起伏の変化に乏しい平坦な島で、最も高いところは標高34.4mで八重山遠見台と呼ばれる丘である。島の周囲にはサンゴ礁が発達し、空から見ると二重丸を描いたように見える。島内各所にある御嶽林や部落を取り囲む擁護林は、フクギ、イヌマキ、テリハボクを主体とする森林植生で、面積の割には緑豊かな島である。

多良間島は畑作を中心とした純農村で、サトウキビを主幹作物にし、ラッカセイやニンニクなどが作られている。島全域が琉球石灰岩からなるためか、水田はみられない。集落は島の北側に集中し、島の南側にはサトウキビ畠が広がっている。そして、それらを取り囲んで、海岸林が発達している。

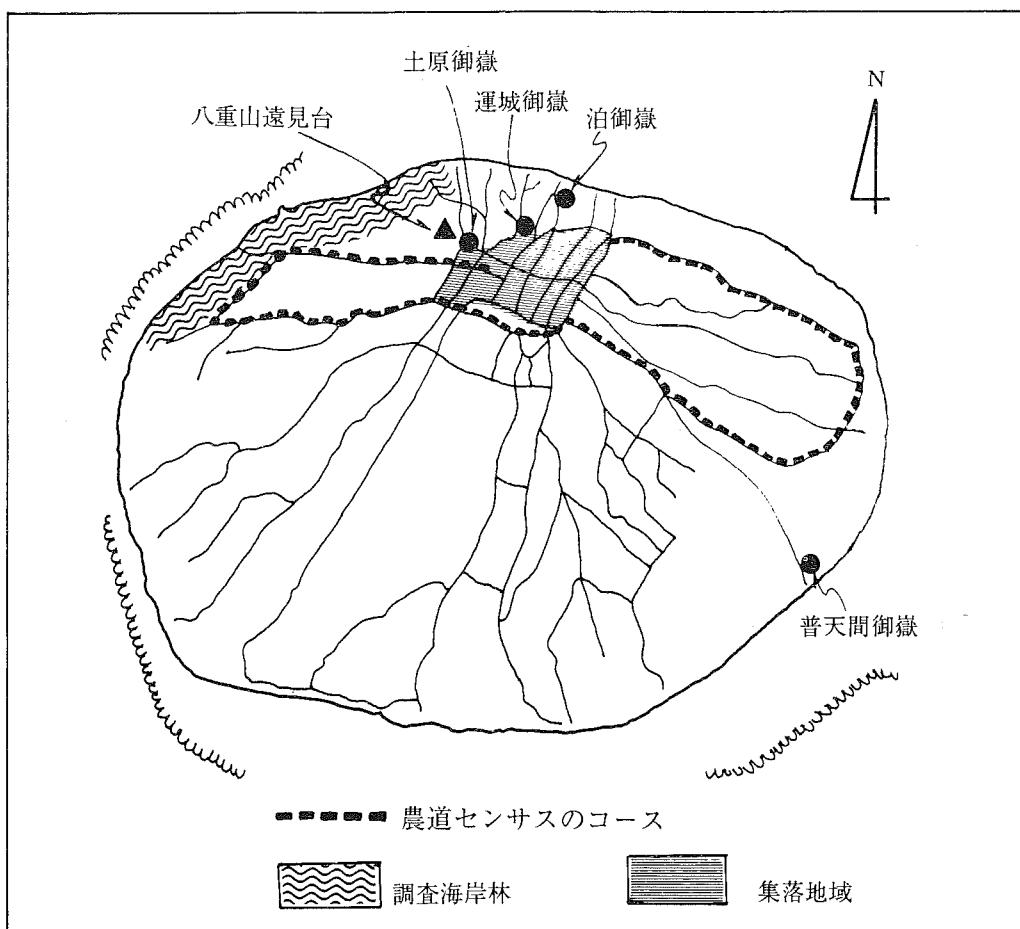


図1. 調査地点及び調査コース

調査は主として夜間に実施し、調査時間は1～2時間であった。任意に選んだ場所をランダムに歩き回り、目撃した両生爬虫類を記録し、必要に応じて採集した。調査地としては、植生の状態のよい御嶽の周辺や海岸林を選んだ。調査の日程、場所、および時間は以下の通りである（図1参照）。

- 6月4日、泊御嶽と運城御嶽の周辺（Pm 10:00～12:00）。
- 6月5日、自転車を利用して、島の北側の耕作地域を調査（Pm 3:50～6:00）。
- 6月6日、土原御嶽周辺（Pm 10:00～11:00）。
- 6月7日、北西海岸の海岸林（Am 9:00～Pm 3:00）。
- 6月8日、集落地域内（Pm 11:00～12:00）。
- 6月9日、普天間御嶽周辺（Am 9:00～11:00）。

III、結果および所見

1. 確認された両生爬虫類について

調査期間中に確認した両生爬虫類について、以下に簡単に記す。このリストの内、サキシママダラ以外は調査期間中に筆者によって確認された。また（ ）内に示した標本番号は、いずれも沖縄県立博物館に登録されたものである。

カエル目 SALIENTIA

ジムグリガエル科 Brevicipitidae

ヒメアマガエル *Microhyla ornata* (DUMERIL et BIBRON, 1841)

運城御嶽および泊御嶽林内（成体）；VI 4、1987。中央部耕作地域の側溝内（幼生）；VI 5、1987。仲筋部落内路上（成体）；VI 5、1987。

成体の目撃数は少なかったが、部落内や耕作地域のあちこちの溝で多くの幼生を見ることができた。

アカガエル科 Ranidae

ヌマガエル *Rana limnocharis limnocharis* WIEGMANN, 1835

仲筋部落内（成体）；VI 4、1987。中央部耕作地域の側溝内（幼生）；VI 5、1987。

夜になると側溝の中でさかんに鳴いていた。部落内いたるところで見ることができる。また部落内や耕作地周辺の側溝および用水池では幼生も多数見られた。

トカゲ目 SQUAMATA

ヤモリ科 Gekkonidae

ホオグロヤモリ *Hemidactylus frenatus* DUMERIL et BIBRON, 1836

仲筋部落内; VI 4、1987。

宿泊している旅館の部屋で幼体を採集した（標本番号 OPM-H-0956）。また採集していないが、成体も目撃することができた。野外では見つけることはできなかつた。

トカゲ科 Scincidae

サキシマスペトカゲ *Scincella boettgeri* (VAN DENBURGH, 1912)

土原御嶽; VI 6、1987。八重山遠見台前の海岸林; VI 7、1987。

御嶽林や海岸林の林床でよく見つかった。特に島の北西部、八重山遠見台付近の海岸林内で多く見つかった。ここでは3個体を採集した（標本番号 OPM-H-0957、OPM-H-0958、OPM-H-0959）。いずれも幼体および亜成体で、それぞれ全長26mm、43mm、88mmであった。

ヘビ科 Colubridae

サキシママダラ *Dinodon rufozonatus walli* STEJNEGER, 1907

野外調査では発見できなかった。島の人間に聞いても最近はほとんど見ないとのこと。ここでは、教育委員会に保存されていた2個体の標本について記録する。

標本1：

採集年月日；1987年4月30日。採集者；下地春堅。

採集場所；多良間島診療所の向いの家、水道メーターの箱の中にいた。

性別；雌。全長；96.5cm（頭胴長78.6cm、尾長17.9cm）。

標本の保管場所；沖縄県立博物館（標本番号 OPM-H-0953）。

備考；2匹ていたが、1匹は逃げられた。

標本2：

採集年月日；1987年5月。採集者；照屋健市。

採集場所；多良間村役場の水タンクの側。

性別；雌。全長；61.3cm（頭胴長47.4cm、尾長13.9cm）。

標本の保管場所；沖縄県立博物館（標本番号 OPM-H-0954）。

高良（1962）はヘビ類に関して、宮古諸島の全ての島々を網羅したかなり詳細な報告をし、その中で多良間島から4属4種のヘビ類を報告している。また当山（1976、1981）は、宮古島、来間島、多良間島、水納島の四つの島におけるカエル類とトカゲ類について報告し、多良間島からは6属7種の両生爬虫類を記録している。これらをまとめると、多良間島の両生爬虫類相は、6科10属11種になる。ちなみに宮古諸島の両生爬虫類相が9科18属20種から成るので、多良間島にはその半分が生息していることになる。

今回の調査では、5科5属5種類の両生爬虫類が確認された。これらはすべて、高良（1962）や当山（1976、1981）に含まれるものであり、多良間島の両生爬虫類相については、特に付け加えるべき知見は得られなかった。

2. サキシママダラの採集について

多良間島からのサキシママダラの報告は、高良（1962）が初めてである。しかし、この中にサキシママダラを採集したという記録はない。また、その後のいくつかの出版物などに、サキシママダラの分布地として多良間島があがる。その出典の多くは高良（1962）であり、採集した個体を基にしたサキシママダラの記録は、著者の知る範囲では見あたらぬ。今回見つかった標本は、多良間島におけるサキシママダラの存在を示す貴重な証拠となるだろう。

3. ヒメアマガエルとヌマガエルについて

当山（1981）は、多良間島に分布するカエルのうちヌマガエルとヒメアマガエルの2種は移入された可能性があることを記している。今回の調査では、ヒメアマガエルについて明確にすることはできなかったが、ヌマガエルについては明らかに移入されたことがわかった。1977年発行の「在沖多良間郷友会20周年記念誌」の中に『西辺生れの蛙君』というみだしで、ヌマガエルが持ち込まれた経過について記述されている。筆者は多良間島に生まれ育った大山春翠氏である。以下参考のために、当該項目の全文を掲載する。

『昭和二七年八月、夏休みを利用して西辺小中学校の中学生が多良間旅行に来島した。引率の先生は現在佐良浜中学校長の仲間哲雄先生那覇在開南小学校教諭上原利彦先生たちである。当時西辺中学校長は村出身の垣花良香先生である。良香校長先生は小さい島ながらも多良間島のよさを紹介したいために多良間旅行をすすめたようである。生徒たちもまだ見たことのない島、郡内で一番遠いへき地の島を見たかったのであろうか希望者が多かった。多良間出身の校長と上原先生から「多良間には珍らしくも蛙がない」ことをきいた生徒たちは「よしあみやげはこれだ」と衆議一決、みんなでおたまじゃくしを持寄ることにした。船中でも死にはしないかとみんなで見守りながら多良間上陸に成功、早速、用水

池に放った。あれから二十四年目のこんにち、南のヌーや北の山あたりに蛙の小便に驚かされるときもある。おかげで農民に協力していただいている。(原文のまま)』

この記述から、持ち込まれたカエルがヌマガエルと断定することはできない。しかし筆者の大山氏によれば、現在部落内でよくみかけるカエル(ヌマガエルのこと)はもともとはいなかった。子供たちの修学旅行の後から見られるようになった。このことから生徒たちが持ち込んだカエルはヌマガエルのことである。また西辺の生徒たちが、選択的にヌマガエルの幼生だけを採集したとは考えられない。もし当山(1981)にあるように、ヒメアマガエルが持ち込まれたものであるなら、あるいはこの時ヌマガエルと一緒に持ち込まれたのかもしれない。

IV、引用文献

- 高良鉄夫, 1962. 琉球列島における陸生蛇類の研究。琉球大学農家政工学部学術報告, 9号: 1-202。
- 当山昌直, 1976. 宮古群島の両生爬虫類(I)。爬虫両棲類学雑誌, 6(3): 64-74。
- 当山昌直・久貝勝盛・島尻沢一, 1980. 宮古群島の両生爬虫類に関する方言。沖縄生物教育研究会誌, 13: 17-32。
- 当山昌直, 1981. 宮古群島の両生爬虫類。沖縄生物教育研究会誌, 14: 30-39。
- 島袋曠・日越国昭・川上勲, 1981. 多良間村の主な御嶽の植生。沖縄県天然記念物調査シリーズ第21集, 沖縄県社寺・御嶽林調査報告Ⅳ: 131-141。
- 在沖多良間郷友会, 1977. 在沖多良間郷友会20周年記念誌。

＜資料紹介＞
喜如嘉の土地売却証文類

上江洲均
(沖縄県立博物館)

＜Short Note＞
Land Sale Contracts of Kijoka Village, Okinawa Island

Hitoshi UEZU
(Okinawa Prefectural Museum)

この資料はかねて平良豊勝氏から祖父平良豊安土地売却関係証文類として、博物館が寄贈を受けたものである。時期的には、土地整理のあった明治30年代である。古いもので明治32年、新しいもので明治39年である。年代不明のものを含めて19通である。

「売却証文類」の内訳けは、田方売却証文13通、畠売却証1通、土地代金受取証1通、金銭借用書1通、同延期願1通、その他2通となっている。(表1参照)。

土地整理については、明治32年から始まり同36年に完了する。その背景には「土地制度の大変容(有力者への土地集中、土地の質入れ・売買の増大)、田畠勝手作りの黙認による農民の土地私有欲の増進などがあったほか、地割制度そのものが生産力を停滞させる元凶であるとの認識が、「当局者のあいだにしだいに強くなつていった」(西原文雄執筆、『沖縄大百科辞典』948頁) があったという。

土地制度についてはこれ以上詳述はできないが、「喜如嘉の土地売却証文類」は時期的にこの土地整理期のもので、その頃の様子をしのばせるものがある。8号(明治35年3月20日)の証文からはじめて地番がでてくる。また、1号(明治32年9月24日)から8号(明治35年3月20日)までは、田の面積を「○丸○束」で表していたのを10号(明治37年3月31日)からは「○畝○歩」にかわっている。(9号は記載なし)。

また、1号、2号、4号には「配当地割帳を貴殿へ面付替」することが書きこまれており、6号、7号、8号では「地租税改正実行セラル迄ノ公費ハ私ヨリ負担」する旨の条項

が記入してある。土地制度進行中の過渡期のようすがうかがえる。

13号と14号は「土地売却証」とその土地の「代金受領証」で一件書類である。

16号は借金40円の利息分として、毎月14日の「入込奉公」をする証文である。17号はやはり借金のかたに息子を奉公させてもよいというもので、古い時代の身売りにもつながる一面を見ることができよう。

表1. 喜如嘉の土地売却証文一覧

| 番号 | 文書名 | 年月日 | 宛名 | 差出人 |
|----|-------------|--------------|------|-------|
| 1 | 田方売却証書 | 明治32年 9月24日 | 平良豊安 | 宮城弘道 |
| 2 | 証文(田方売却) | 明治32年 9月25日 | 々 | 山城盛保 |
| 3 | 証書(田方売却) | 明治32年旧9月25日 | 々 | 平良貞一 |
| 4 | 証書(田方売却) | ?年 9月25日 | 々 | 金城満幸 |
| 5 | 証書(田方売却) | 明治32年 10月3日 | なし | 平良繁幸 |
| 6 | 証書(田方売却) | 明治34年 9月15日 | 平良豊安 | 山城源吉 |
| 7 | 証書(田方売却) | 明治35年 2月24日 | 々 | 山城保長 |
| 8 | 証書(田方売却) | 明治35年 3月20日 | 々 | 喜如嘉朝副 |
| 9 | 田方売却証 | 明治36年 8月27日 | 々 | 山川福三 |
| 10 | 田方売却証 | 明治37年 3月31日 | 々 | 山城真嘉 |
| 11 | 土地売却証書(田) | 明治37年 6月28日 | 々 | 山城保次郎 |
| 12 | 証書(田方売却) | 明治37年 8月19日 | 々 | 金城田吉 |
| 13 | 土地売却証(田) | 明治37年 9月22日 | 々 | 山城真嘉 |
| 14 | 田方代金受取証 | 明治37年 11月29日 | 々 | 々 |
| 15 | 土地売却証(畠) | 明治37年 12月5日 | 々 | 喜如嘉朝重 |
| 16 | 借用証 | 明治38年旧11月 | 々 | 津波松吉 |
| 17 | 延期証 | 明治39年 9月10日 | 々 | 金城牛 |
| 18 | 金子支払いについて依頼 | ?年 10月15日 | 々 | 大嶺永秀 |
| 19 | 田方買入代金内訳 | ?年 10月29日 | なし | なし |

△1号▽

田方壳却證書

印紙

当村字石保川原

一 田方七丸き三束印 叶米三斗六合六勺印
但此代金式拾九円式拾錢也 印

右田方之儀私所有地之處今般無拋入用有之候ニ付但書之代金を以て貴殿へ永々壳却致し候儀実正也 然ル上ハ村配当地割帳を貴殿へ面付替致し候ニ付爾後右田方ハ私ニ於テ一切關係無之候
依て証書如件

大宜味間切喜如嘉村二十番地
明治三十二年九月廿四日 壳主 宮城弘道印
同間切同村式百四十四番地
保証人 宮城張道印
喜如嘉村
平良豐安殿

(二六・六×三八・○ 白紙)

△2号▽

證文

当村字

一 田方五丸き五束五分 印
但此代金式拾式円拾錢也 印

右田方之儀私共所有地之處今般無拋入用有之候ニ付 但書之金額を以て永々貴殿へ壳却致し候儀実正也 然ル上ハ村配当地割帳を貴殿へ面付替之上右地所ハ私ニ於テ一切關係無御座候 依テ証書如件

大宜味間切喜如嘉村百五十三番地
明治三十二年九月廿五日 壳主 山城盛保
同人 長男
全 上 山城盛長 印
同村百二十番地
全 上 山城盛久 印
喜如嘉村
平良豐安殿

(二六・四×三七・○ 白紙)

△3号▽

證書

印紙

當村とくまし原
文
證

一田方三丸き九束三分
叶米

喜如嘉村字仲間福原

一田方五丸き所

(印)

此叶米式斗壱升五合

(印)

此壳却代金式拾円也

(印)

右田方私所有地ニ候處今般都合ニ依り前記ノ代金ヲ以テ永々壳渡候ニ付 當村地方

分ケ帳も貴殿へ面付替致候儀相違無之候 就テハ右地所ニ属スル権利義務ハ
総テ貴殿へ移候ニ付テハ自今私ニ於テハ
一切關係無之候 依テ 證書如件

喜如嘉村百三番地 平民

平良貞一
(印)

明治三十二年旧九月廿五日

大宜味間切喜如嘉村百壱番地
平良豊安 殿

(二五・八×三七・〇 白紙)

△4号▽

當村とくまし原
文
證

一田方三丸き九束三分
叶米

但此代金拾六円也
右田方之儀私所有地之處今般無拠入用有之候ニ付 但書之代金を以て
永々貴殿へ壳却致し候儀実正也
然ル上ハ村配當地割帳を貴殿へ面付替致し爾後右田方私ニ於テ一切
關係無御座候 依テ 證書如件

九月廿五日

大宜味間切喜如嘉村七番地

壳主 金城満幸

同人長男

上 金城幸一

喜如嘉村
平良豊安 殿

(二六・四×三七・八 白紙)

證書

印紙



喜如嘉村字外ふりた原

一 田方四丸き六東四分 

叶米壱斗七升六合三勺式才

此壳却代金拾六円七拾錢四厘 

右ハ私所有地之処今般都合ニ依リ前記之

代金ヲ以テ貴殿へ壳渡候儀相違無之候

就テハ右地所ニ對する権利義務ハ總テ

貴殿へ移転候ニ付テハ自今私ニ於テハ一切

関係無之候 萬一右地所ニ關シ他ヨリ

故障等相生シ候時ハ私ハ勿論保証人ニ

於テ取捌少も貴殿へ御迷惑相掛

不申候 依テ後證之為メ證書一札差上置候也

大宜味間切喜如嘉村式百武拾壹番地平民

明治廿二年旧十月三日 売主 平良繁幸 

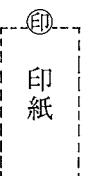
全間切全村百七拾八番地内第壹号

保証人 福地幸成 

(二六・六×三八・四 白紙)

證書

印紙



喜如嘉村字真謝原

一 田方壹枚  但丸きにして壹丸き七東所此壳却代金八円五拾錢也 

右者私所有地今般都合ニ依リ前記ノ代

金ヲ以テ貴殿へ永々壳渡候儀実正也 

就テハ右地所ニ關スル権利義務ハ貴殿へ

移転致私ニ於テ關係無之候 然ル處

地租稅改正實行セラル迄ノ貢租公費

ハ私ヨリ負担致候儀相違無之候

依テ證書一札差上置候也

一名代村二十四番地

明治三十四年九月十五日

喜如嘉村百壹番地

平良豊安 殿

山城源吉


(二七・〇×三九・〇 朱墨紙)

△7号▽

證書

印紙

喜如嘉村字真謝原

一 田壱枚印 壱丸き七束所

此壳上代金八円也

印

右ハ今般都合ニ依リ前記代金ヲ以テ貴殿へ
永々壳渡候儀実正也 就テハ右地所ニ関スル
権利義務ハ総テ貴殿へ移転致私ニ於テハ
一切關係無御座候 然ル処地税改正実
行セラル迄ハ貢租公賃私ヨリ負担致候
儀相違無之候 依テ證書差上置候也

一名代村二十二番地

明治三十五年二月廿四日 山城保長

印

喜如嘉村百壱番地
平良豊安 殿

(二六・四×三八・〇 朱野紙)

△8号▽

證書印

字立名原地番九三二

一 田方壱丸壱束三分所

印

此壳渡代金四円八拾五錢九厘

印

右ハ私所有地ノ処今般都合ニ依リ前記ノ
金員ヲ以テ貴殿へ永々壳渡置候儀実正
也 就テハ右地所ニ対スル権利義務ハ総テ
貴殿へ移転致候 然ル処地租税改正
実行セラルマテハ貢租公賃私支弁
致シ貴殿へハ故障相掛不申候 依テ
為後証如件

大宜味間切喜如嘉村百六番地
明治三十五年三月廿日 喜如嘉朝副
喜如嘉村百壱番地
平良豊安 殿

(二六・四×三七・七 朱野紙)

△9号▽

田方売却証

印紙
字板張原

一田壱枚 地番一八〇六

代金 拾壱円六拾錢

印

右ハ今般都合ニ依リ前記ノ代金ニテ貴殿へ永々売り渡し候儀相違無之候然ル上ハ右地所ニ對スル權利義務ハ以後凡テ貴殿へ移転シ私ニ於テハ一切關係無之候 依テ証書一札差上置候也

大宜味間切喜如嘉村式百四拾番地
山川福三 印

明治参拾六年八月式拾七日

平良豊安 殿

(二六・四×一八・〇 朱墨紙)

朱墨紙

△10号▽

田方売却証

印紙

喜如嘉村字真謝原地番六九七
一田壱枚□參歩也

此代金七円五拾六錢也

印

右田方之儀私所有地之處無拋入用差起候ニ付 前記之代金ヲ以テ貴殿へ売渡候儀実正也 就テハ右地所ニ對スル權利義務ハ總テ貴殿へ移転シ私ニ於テハ一切關係無之候 依テ證書一札差上置候也

大宜味間切謝名城村一名代式拾壱番地

明治三十七年三月三十一日 山城真嘉 印

大宜味間切喜如嘉村百壱番地
平良豊安 殿

(二二・八×三三・〇 朱墨紙)

朱墨紙

△11号▽

印紙

土地売却證書

謝名城村字根謝銘原地番四九四番
一 田式畠拾弐歩

此売却代金拾円四拾錢

右地所之義私有之処今般無拠入用差
起り候ニ付 前記ノ代金ヲ以テ貴殿へ売却
候儀実正也 就テハ右地所ニ對スル權利
義務總テ貴殿へ移転致シ私ニ於テハ一
切關係無之候 依テ売渡證如件

印

謝名城村一名代三十一番地
明治三十七年六月廿八日 山城保次郎
大宜味間切喜如嘉村百壱番地
平良豊安 殿

△12号▽

印紙 証書

大宜味間切喜如嘉村字立名原地番八九四
一 田方壱畠拾六步
此代金拾円也 印

右ハ私儀要々有之前記ノ代金ニテ本行
ノ田方壱畠拾六步 儀相違御座ナク候 然
ル上ハ右地所ニ關スル權利義務ハ爾後
私ニ於テ一切關係仕リ不申 单ニ貴殿
へ任せ上ゲ可申 依テ証書差上置候也

大宜味間切饒波村式拾壹番地
壳主 金城田吉 印

明治三十七年八月廿九日
喜如嘉村百壱番地
平良豊安 殿

(二二一・八×三一・六 朱野紙)

(二四・三×三一・三 朱野紙)

△13号▽

土地売却証

印紙

喜如嘉村字板張原地番一八〇八

印紙

喜如嘉村字板張原地番一八〇八田七畝武

一 田七畝武拾九步
此壳却代□□壹円武拾錢

印

右田方私所有地□□ 今般都合ニ由リ前記

之代金ヲ以テ貴殿へ壳渡候儀確実也

就テハ右土地所有權貴殿へ移転致シ

私ニ於テハ一切關係無之候 依テ壳渡

証如斯御座候也

謝名城村一名代二十一番地

山城真嘉

印

明治三十七年九月廿二日

喜如嘉村百一番地
平良豊安 殿

(一三三・六×三二・二 朱野紙)

△14号▽

田方代金受取証

印紙

印紙

喜如嘉村字板張原地番一八〇八田七畝武

拾九步□□七拾壹円八拾武錢之内
一 金四拾円六拾□□

印

但明治三拾七年九月廿二日領收済
但

□□□壹円武拾錢

印

右本行金員正ニ受領候也 尤も分書
之金員ハ別紙壳却之通り相違無御座
候 依テ為後証如件

謝名城村一名代廿一一番地

山城真嘉

印

明治三拾七年十一月廿九日

喜如嘉村
平良豊安 殿

(一三三・六×三二・八 朱野紙)

△15号▽

印紙

土地売却證

喜如嘉村字石保川原地番一〇九一

一 烟壺式拾七歩

(印)

此壳却代金拾壺円也

(印)

右地所之儀今般都合ニ由リ前記之金員ヲ
以テ壳渡候儀実正也 就テハ右土地所
有權貴殿へ移転シ爾后私ニ於テハ一
切關係無之候 依テ証書差上置候也

大宜味間切喜如嘉村式百四拾七番地
明治三十七年十二月五日 喜如嘉朝重

(印)

大宜味間切喜如嘉村百壺番地
平良豐安 殿

(一三三・七×三一・八

朱野紙)

△16号▽

借用證

印紙

印紙

(印)

一 金四拾円也

但利子送り用毎月拾四日ツ、
貴宅へ入込奉公可仕事

右ハ無拠入用ニ付前記之金額正ニ押借候儀

実正也 尤モ元金御返金之儀ハ御入用次

第完納可仕候 若シ毎月之仕事仕不足

之分ハ壺日拾五錢ツ、手間金取立月末

二決算可仕候萬一彼是相違ニ及候場

合ハ借主ハ勿論保証人ニ於テ全ク弁償

可仕候 依テ借用如件

明治三拾八年旧十一月

本部間切伊豆味村百三十七番地

借

主

津波松吉

大宜味間切喜如嘉村千百六十八番地

保証人

同

山城感合

(印)

大宜味間切喜如嘉村式千三百四十八番地

保証人

同

喜如嘉朝重

(印)

大宜味間切喜如嘉村五百十五番地
平良豐安 殿

(二二六・六×三七・〇 白紙)

△17号▽

延期証

一 金式拾円也

右ハ前々ニテ借金四拾ノ内残金とシテ本行ノ
金額ハ旧来ル十一月廿五日限リ堅固ニ御
返却可仕候若相違之義共御座候ハバ私ノ

二男金城太郎御召遣ニ為致候 乍此上
不行届候トキハ御勝手次第べく被成下候
仍テ延期証如件

明治三十九年九月十日

喜如嘉村四百九十二番地

借主 金城牛^印
保証者 二男 太郎

喜如嘉村屋号石保
平良豊安 殿

(二六・四×三七・六 朱野紙)

△18号▽

左記ノ金員田中幸藏へ相届置候也 記

一 金拾六円五拾八錢弐分

金ニシテ八百式拾九□貫文

右ハ字一名代かん細工屋へ私せ貸付金
返弁ニシテ御方へ売上田方代より都合
有之候間右ノ分ハ私せ直ニ御渡彼下
度御依頼候也

田嘉里村

大嶺永秀

十月十五日
平良豊安 殿

(一一・〇×三三一・〇 白紙)

19号

一名代 鍛治細工屋より買入田方

拾弐丸き六束代

一 金參千五百九拾壹貫文

異動

金千五百六拾貫文

賃渡金四百貫文の利子籠テ

十一用中田 現金度

金武百五拾貫文

旧十月廿二日現金渡い

金五拾貫文

大嶺永秀へ引向二テ渡レ

金八百弐拾九貫文現金渡

旧十月廿九日

本行

(一三〇×三五六)

△1号原本▽

田方秀却
鑒書

一
因方七

右^③或^了義^此對^也

人用之不付但書一紙言為平也

永嘉却成一派俗言也

未破為代割帳半死而告福成於前

依毛而書之件

大嘗時聞切發聲
甲子年歲在己未
歲在己未
歲在己未
歲在己未
歲在己未

因爲向來形勢爲中國東北
保雙宮本張首

平良生

沖縄県立博物館

沖縄県立博物館紀要

第 14 号

1988年3月31日 発行

編集・発行 沖縄県立博物館

〒903 那覇市首里大中町 1-1

Tel (0988) 84-2243

84-4353

印 刷 光文堂印刷株式会社

〒901-11 南風原町字兼城577

Tel (0988) 89-1121